
マフィアと祓魔師

パイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフィアと被魔師

【Nコード】

N4153U

【作者名】

パイン

【あらすじ】

リポーンにボコられたランボの10年バズーカに誤って当たり綱吉が異世界にトリップしてしまった！

行く宛のない綱吉に学園の理事長の計らいで聖十字学園に通い同じクラスの奥村燐と友達になり一緒に被魔塾に通う。

一方その頃リポーンは、消えた綱吉を連れて戻すべく残りの守護者を集めジャンニーンが改良した10年バズーカで異世界に送った。けして関わることはない世界が繋がる時、物語が初まる。

プロローグ（前書き）

初めて小説を書きました。

ですから全くの初心者なので誤字脱

プロローグ

初めて小説を書きました。

ですから全くの初心者なので誤字脱 明るい空とどこまでも続く
草原に一人の男が立っていた。

しかし良く男の背中を見ると本来人間にはない白い大きな翼が二
枚生えていた。

物質界と虚無界がありここは天界。死して生前良い行いをした人
間が行き着く場所。

男の腰まである銀色の髪が風に吹かれ月の様に無機質な美貌が現
になった。

ふと、彼は背後に現れた男にちらりと視線をやるとまた前を見た。

「何しに来た、世界の傍観者」

「別に…ただ兄を無くした“哀れな大天使”が今どうなっている
か見に来ただけだよ」

「そうか」

「まだまだよ、これから物質界に帰ってしようと思っていた所」

「神の居ない今、私が天界を支えなければならぬ…その為に二
人が必要なのだ」

「ただだよ…七つの天象と魔神の落胤が更に強くなるとはいけない」

世界の傍観者が、そう言うつと大天使は、何も言わず男を置いて消えてしまった。

「歴史上二回の天使と悪魔の戦いに次は、どちらが勝つのだろうか」

二人喋らず黙っていたが、大天使は、世界の傍観者に疑問を投げつけた。

「七つの天象は魔神の落胤と接触したか？」

「ただだよ、これから物質界に帰ってしようと思っていた所」

「神の居ない今、私が天界を支えなければならぬ…その為に二人が必要なのだ」

「ただだよ…七つの天象と魔神の落胤が更に強くなるとはいけない」

世界の傍観者が、そう言うつと大天使は、何も言わず男を置いて消えてしまった。

「歴史上二回の天使と悪魔の戦いに次は、どちらが勝つのだろうか」

世界の傍観者は、しばらく大天使が消えた場所を見つめて消えてしまった。

さつきまで人がいないかの様に草原だけが風に揺れていた。

マフィアのボスと魔神の落胤

ランボの10年バズーカの故障でどこか分からない世界に飛ばされてしまった沢田綱吉を追って来た守護者たち。飛ばされた綱吉と守護者たちは、“中立の傍観者”と名乗る男になぜ、自分たちがこの世界に呼ばれたかを教えてもらい衝撃の事実を知る。

一方その頃、鉄鋼の一番に座っているピエロの様な格好をした男は、空をみやげこれから起きる“戦争”に笑う。

そして二つの世界の均衡を崩す大事件が今起きようとしている。

…そして彼らが目にした世界とは。

七つの天象と青の炎が揃う時、天使と悪魔が世界対戦の時を奏でる。

異世界へ！（前書き）

前回の原稿で読みづらい思いをしてまで見てくれた方々に感謝します。

今更ですが小説の読み方は、【マフィアのボスと】から【プロローグ】とゆう感じで見て下さい。

最後にこんな小説家が、書いた作品を見ていただいて本当にありがとうございます！ やつと綱吉が異世界へ行きます。

できれば他のリボキアラや青工キアラも出せる様に頑張ります。

異世界へ！

絶対的暴君が支配している平和な町、並盛町。
そこのある沢田家で事件が起こった。

「ちねえリボン！」

「うぜえ」

ドゴー！

「ぐぴあー！！」

全身牛柄のタイツを着た子供が、黒のスーツにボルサリーノを被りその上に形状カメレオンのレオンを乗せた見た目が赤ん坊だが沢田綱吉の家庭教師にして最強のヒットマンリボンが、いつもの如く向かって来るランボに蹴りをいれるところを見た綱吉は、またかあため息をついた。

「ぐすう…が…ま…ん…うわあああ…！！」

等々たいきれなくなったランボが鳴き始めアフロ頭からバズーカを出した。

だが、何故かバズーカは、綱吉の方に向けられていた。

「え！？ちよっランボ、バズーカが逆逆！！」

綱吉の訴えもむなしくバズーカが引かれ“ぼん！”と煙りが出て

晴れた時は、綱吉の姿が、見当たらなかった。

名目聖十字学園の誰も使わなかった旧男子寮の六〇二号室に訳ありの兄弟が居た。

「があああ！訳わかんねえ！！」

「まず口より手を動かしてよ兄さん」

机に教科書を出してだらけている兄の隣に弟の雪男は、ため息をついた。

「?…なあ雪男」

「なに兄さん」

「何かこの部屋歪んでねえ？」

「…歪んではないけど、大丈夫兄さん？」

「わりい雪男、やっぱ俺の気のせい？」

ぱりいん！

二人は、今度こそ何か割れる音を聞くやいなや戦闘準備に入り音がした場所を睨んだ。

「来るよ兄さん！」

「おう！」

二人が睨んでいた空間から“ なにか ” がぼてえと現れた。

「……………人間？」

「待つて兄さん！悪魔かも知れないから近づいちゃ駄目だよ！」

そんな雪男の忠告も無視し床に倒れている紅茶色の髪をした少年に近づいた。

「こいつ悪魔じゃねえはまだ生きてるぜ雪男」

「はあ…とりあえずその少年をベッドに運びましょう」

雪男がそう言うのと焔は少年を抱き上げその軽さに驚きながらも自分の布団に寝かせた。

「僕は、フェレス卿に会いに行きますからその少年を見ててね、万が一危険だと思ったら倶利伽羅くじからを抜いていいから」

「分かったって！お前は俺の母ちゃんかよ！」

焔の言葉を無視して雪男は、軽く手を挙げると理事長室に繋がる鍵を差し込んだ。

まじない（前書き）

行き当たりばったりな自分でごめんなさい！何とか次の小説を挙げるために頑張っています。

また短いです。

できれば、燐と綱吉が仲良く被魔塾に通うシーンを書く予定です。あくまで予定なのでまだ分かりません。

長くなりましたが、このダメ人間が書いた小説を見て下さった方々に感謝します。

まじない

「ねえねえ、この聖十字学園で今流行っているまじない知ってる？」

「まじない？」

「うん、“しんてさま”って言うんだって」

「しんてさま？それって、どんなまじないなの？？」

「うん、あのね…」

まじないに必要な人形を用意します。

用意した人形は、人形ひとがたに似せて作ります。

材料は、なんでもいいです。作った人形が似てなくても心がこもっていれば問題ありません。

最後に花束を持って学園内にある噴水に誰にも見られない様に夜中来て、花束でくくった人形を水に落とします。

後は、帰る時にけして後ろを振り返っては行けません。

もし、振り返ってしまうとしんてさまにあの世に連れて行かれるからです。

記憶（前書き）

やっと書けました！途中色々なハプニングがあって遅くなりました。前回予定でしたが書くつもりだった燐と綱吉の話しが書けなくて残念です。

期待していたのにごめんなさい。

今回は、頑張って書きたいと思っています。

記憶

聖十字学園の理事長室にメフィスト・フェレスが資料を読みながらここに来るであろう訪問者を待っていた。

「そろそろですかね」

「こんにちは、ガチャ。」

「入りなさい」

「失礼します。フェレス卿、話がありますがいいでしょうか」

「ええ、構いませんよ。奥村先生」

理事長室に着た雪男は、高級そうなソファーに座らず真っ直ぐデスクの前に向かった。

「僕たちの部屋が僅かだけ歪んだことは知ってますか？」

「勿論ですとも！この学園で私が知らない事など何一つありませんからね」

「…その歪みからどういう原理か知りませんが、人が落ちてきたのですが、フェレス卿の仕業では、ありませんか？」

「失礼ですよ奥村先生、紳士に向かって…それよりここ最近流行っているまじないを知ってますか？」

「ああ、最近学園で広まったしんてさまとか言う下らないまじないですね、知ってますがそれがどうしましたか？」

「いえ…まあ私の学園にさえ傷を付けなければいいんですがね…その人間の事は、私に任せて下さい」

「分かりました、失礼しました」

「がちゃ…」

雪男が理事長室に出て完全に気配が消えたのを確認したメフィストは、デスクにまだ置いてある資料を再び見た。

「“てんしさま”ですか…まあ私の愛しい末の弟と学園に何もしなければ、黙認してあげますよ…今は、ねえ」

・
燐は、雪男が来るまで少年の看病をしていたら、足元に柔らかい感触がして下を見たらしっぽが2つに別れた猫又のクロがいた。

「りん、そのにんげはなんだ？」

「さあ、俺にも分からないんだ」

クロは、ベッドに寝ている少年を眺めていたかと思うと少年の布団の中に入ってしまった。

「こら、クロ！起きちまうだろ」

「だってりん、このにんげなんかすごくきもちいいんだよ！」

そう言うそのまま眠ってしまい燐は、少年とクロを離そうとしたが、クロの気持ち良さそうな寝息にため息をつきながらとりあえず夕食を作るべく調理場に向かった。

「ママ！ママ！！」

綱吉は、その景色を見て啞然としてしまった。

たった一人の少年に子供たちが怯えていたからだ。

そう、まるで化け物を見る様な目で。

「……………ふん！」

少年は、誰もいなくなった公園のブランコに座り俯いてしまった。

綱吉は、肩を震わす少年にどう声をかけようか迷っていたら背後に誰かが近づく音に振り返った。

「おやあ？君は、奥村燐君じゃないですか、何故泣いているのです？」

水玉のスカーフにピエロが着ている服に少し似ててシルクハットを被っていて表情が分からないが、僅かに見えた翡翠色の瞳と薄い唇が見えた。

「ぐずう…ないてねえよ！つか、おじさんなんでおれのなまえしつてるんだよ？」

「おじい！？……………私の名前は、メフィスト・フェレスと言います。」

藤本の親友ですよ」

「とうさん（じじい）のしんゆう？」

「ええ」

メフィストと名乗った男は、空いているブランコの隣に腰をかけた。

「あんな輩の事など気にする必要はありません。何故なら人間は、自分たちと少し違うだけで差別し迫害する生き物だからですよ」

「はく……さ？」

「（クス）すみませんね、貴方には、まだ早かったようですね」

メフィストは、ブランコから立ち上がると燐と言う少年の頭を手袋をした手で撫でた。

「め……めふ……」

「メフィでいいですよ」

「……メフィは、どうしておれにやしくするの？じじいのしんゆうだからか？」

「まあそれもありますが、本当の理由は、貴方を気に入ったからです。愛してます、燐」

「うむう！？？」

「えええええ ……!!?」

なんとメフィストは、燐の小さい唇に口づけをしていた。

綱吉が見えない二人を良いことにポカンと口を開けたまま絶句してしまい、燐は、顔を真っ赤にして自分に口づけをした男を睨んでいた。

「何するんだよ！」

「ほら、元気になりましたよ？」

「それは！」

「燐、もしこの世界に居るのが辛くなったら私が貴方を連れて行きます」

「メフィ…」

「貴方を見てると昔の友達を思い出しましてね」

「ともだち？」

「ええ、この私ですら圧倒する力を持ちながら強くて気高く愚かなほど優しい人間ですよ…」

「全く貴方。本当に人間なんですか？」

「ふふふ、まさか友だと思っていたメフィストが“悪魔”だとはな」

「プリーモ、何故此方に…」

「部下の不始末は、ボスの勤めだぞ？」

「まさか貴方と大悪魔メフィストが友達とは思いませんでした」

「…所でお前たち、俺のデスクで何しようとしていた？」

にこにこい。

「（びくう！）ぼ、僕のせいでは、ありませんよ！元はと言えばこの悪魔が」

「なあ！？貴方がジョットの恥ずかしい写真があるからと言って私をつれだし、誰にも見つからない様に対ジョット用の結果を張れと言ったんですよ！…！」

「……………遺言は、それだけか……………」

「まっ、待って下さい！元はと言えばこのピエロ悪魔が！」

「そう言う貴方だつて…！」

「地獄に落ちろ」

「「ぎゃあああああああ ……！！？」」

意識を失う前に見たのは、悪魔の私ですら見惚れる絶対零度の微笑に、嵌めていたグローブに純度の高い燈色の炎を額にともした美

しい聖人が冷たい瞳で見下ろしていた。

「……………間違いました、

人の皮を被った悪魔です（ぶるう！）」

「そんなにそのひと、こわいのか？」

「怖いです」

「そ、そうか」

二人の間に何とも言えない微妙な沈黙が辺りを包む気まずい状況に立たされた綱吉は、心の中で？世…何やっていたんだとか、メフィストが悪魔だとか、混乱していが、メフィストの話は、まだ続いていた。

「とりあ
えずもう遅いですから帰りなさい」

「…かえりたくない」

「おやあ？何故です？」

メフィストの言葉にしばらく無言でいたが、ゆっくり口を開いた。

「……………とうさんとゆきおに、しんぱいかけたくないから…だからおれ、なるまでかえらない！」

「しかし、かすり傷だとしても治るまでには最低2日はかかりますよ？燐は、その間どうするのですか？」

「あぁ…」

「……」

燐は、まるで今気づいたような声にメフィストは、呆れるが綱吉は、それがなんだか可愛いくって小さい笑った。

「ううう…どうしよう」

「…しかたありませんね」

「メフィ？」

メフィストは、燐の前に座ると指を向けてカウントを始めた。

「1 (アインス) 2 (ツヴァイ) 3 (ドライ)」

ぼんう！

軽い音とともにピンクの煙が、燐を包み煙が晴れた所を良くみれば、あんなに傷だらけだった燐の体が綺麗になっていた。

「これで大丈夫でv」

「す、すげえ！すげえ！メフィは、まほつつかいか!？」

「残念ながら違います、それとこのことは誰にも言っては、いけませんよ？二人だけの秘密です」

「うん、ふたりだけのひみつ!」

今まで雪男や藤本しかしなかった秘密は、燐にとってそれは、とても新鮮なことだからだ。

「ほら、早く帰らないと夜になってしまいますよ。それとも私が送ってあげましょうか？（ぱちい）」

「／／／／い、いらねえよ！！」

燐は、真っ直ぐ公園の入り口まで走ると止まり、まだいるメフィストに振り返った。

「またあえるよな！」

「ええ、またあえますよ」

メフィストは、燐の言葉に頷くと燐は、ニッコリ笑い今度こそ公園から出て行った。
メフィスト

の言葉にしばらく無言でいたが、ゆっくり口を開いた。

あんなに傷だらけだった燐の体が綺麗になっていた。

メフィストは、燐の言葉に頷くと燐は、ニッコリ笑い今度こそ公園から出て行った。

これは…記憶？でも誰の……。
綱吉が頭上に？を飛ばしていたが、なぜか急に眠くなりそのまま意識をまた失った。

「うう…ここは、どこ？何で俺、ベットに寝ているんだ？」

綱吉は、布団から起き上がるうとしたが、隣でくうくうと可愛いらしい声がして柔らかくて温かい感触に視線をそちらに向けた。

「猫？でもしっぽが2つに別れているし…」

眠っている猫に手を伸ばし頭を撫でた。それが心地いいのか喉をゴロゴロと鳴らしながら頭を撫でていた綱吉の手にすりよった。

「ふわふわしてて気持ちな、お前」

綱吉が猫を撫でていると正面のドアが間き、そこから夢で見た子供を大きくしたらこんな感じだろうと思う少年がいた。

「起きたか？もお飯出来たから起こそうと思ってたんだ！」

「え？う、うん。所でここはどこですか？貴方のいったい…」

「細かい話しは、後で話そうぜ。それより雪男が帰って来たからク口起こして食べれる様なら降りて来いよ？」

少年は、そう言うのと降りて行った。綱吉は、仲間のことも心配だが、昼から何も食べていないためお腹も空いていたので、クロと呼ばれた猫を起こしベットから起き上がり、階段を降りた。

再開（前書き）

スライング土下座あああ！

初めの人もそうでない人もこんにちは。

早速ですがごめんなさい。

燐と綱の学園ライフがまた書けませんでした。

こんな嘘ばかり言う筆者に愛の鉄槌を…（ぐふう！）

なにはともあれ小説を見に来てくれた方々に感謝感謝。

皆に嘘ばかりの予告をいいますが、次は、話的に学園ライフが書けると思います。

最後に時々本文の中で抜けている文があったらご自身の想像でカバーして下さい。

では、また会いましょう！

再開

暗い森の中、一人の男が息を切らせながら目にも止まらない速さで駆けていた。

「はあはあ、しつこい奴らだな」

男は、そう言うと一度止まり後ろを向くと、素早く呪文を唱えた。

「偉大なる不動明王よ！魔に属す者を燃やしたまえ！！」

男が、淡々と良く通る声で呪文を唱えると、体から赤い炎が吹き上がり追っ手を襲った。

「ぎゃああああああ ……！！！」

何人もの追っ手の耳障りな悲鳴に男は、一瞬、炎で照らされた美貌を歪まず無表情で見、すぐさま走りだした。

その頃、食事を終えた隣たちは、少年。沢田綱吉にどうやってここまで来たか等を二人に話した。

「て、言う分けです。真実ますか？」

「信じるも何も…」

「僕たちは、被魔師ですよ？それくらいの事には、応じませんよ」

「あははは！…そうですね。」

あの…一つ聞いてもいいですか？」

「何ですか？」

「燐のお尻から何か黒いしっぽみみたいなのが出てるんですが…もしかして燐は、悪魔ですか？」

綱吉の言葉に、燐の肩がビクツと跳ね血色のいい白い顔から血の気が引くのを燐は、感じた。

「綱吉君！兄さんは…！！！」

「いいんだ雪男」

「兄さん」

「綱吉は…やっぱり悪魔の俺が怖いか？」

燐の辛そうな表情をしばらく眺めていた綱吉だったが。

「全然怖くありませんよ？だって燐は、俺を助けてくれたじゃないですか！」

綱吉の台詞に雪男だけでなく燐も目を見張ったが、雪男と燐は突如笑った。

「あははは！お前最高だな！」

「ははは…まさか兄さんにそんな台詞を言うとは…恐れいったよ」

「え？ええ？？」

何が何だか分からない綱吉のおどとした行動が、少動物に見え
燐は、さっきまでの緊迫した空気が和らいだのにほっとした。

「もう遅いから兄さんと綱吉君は、寝て下さい。明日には、綱吉君
用の物が一式揃うはずですよ」

「何から何まで本当にありがとうございます！」

「お休み雪男」

「何から何まで本当にありがとうございます！」

「お休み雪男」

「何から何まで本当にありがとうございます！」

「お休み雪男」

「お休み兄さん」

三人が、いざ布団に入るうつつとした瞬間！

ぱりいん！

部屋の窓ガラスが割れ、そこからボロボロの巫女服を着た、血だらけの男が、入って来て、雪男は、素早く二丁拳銃を構え少し遅れ燐は、俱利伽羅を構えた。

「だれです！」

雪男の質問に男は、答えず、肩辺りで伸ばした金色混じりの白銀の髪で俯いて顔が見えなかつた男が顔を上げそこから覗く氷雫珠瞳アクアマリンの瞳とその顔を見た燐は、大きく目を見張った。

「お前：まさか八雲か！」

「覚えていてくれて僕も嬉しいぞ、燐」

燐以外の二人は、男の冷たく無表情だが、繊細で美しい顔に息を飲んだからだ。

「兄さん、そいつといつ出会ったの」

「俺が、中学の時学校サボって神社で寝ていた時に八雲が現れたんだ」

「最初は、驚いたぞ。悪魔が神聖な神の領域に入ったからな、見つけたい殺すつもりだった…」

八雲は、一度言葉を切ると燐と初めて会った出来事を思いだし無表情の顔に少し笑みを作った。

「まあようするに、一目惚れした僕は、燐に仮制約をしたんだ」

「げえ！何時の間に！？」

「あくまでも仮だから僕は、本来の力の9%も出せないからあの程度の刺客にも手こずってしまった」

「おい八雲刺客て！」

隣が最後まで言い終わる前に八雲は、割れた窓から身を投げだした。

「なあ?!」

三人は、驚きながらも下で八雲が言っていた刺客に目を見張った。

「おい、雪男。あいつら…」

「…夜中寮に忍びこんで僕の弁当を恋人が作ったとかん違いしウコバツクの弁当を捨て危うく料理されそうになったA、B、C、ですか？」

「A、B、Cって…」

綱吉は、前半はともかく後半の言葉に顔を引きつらせ二人と一緒にありえな戦いを見た。

「なあ雪男、あいつらって人間だよな？」

「そうですが？」

「じゃ何で傷だらけの血みどろになりながら神の八雲と戦っているんだ？」

「さあ、知りませんよ」

「いや！こころは、突っ込もうよ!？」

「別に綱吉君（突っ込み）がいるからいいんじゃないんですか？」

「何で！？てか（ ）の言葉は何！？？」

三人は、そんなコントの様なやりとりと下の戦いとの違いにもう一人誰かいたらカオスだと思っただろう。

「燐は、相変わらずだな」

三人組と戦っていた八雲は、上のやりとりに苦笑いしながら今度は、前を見すえた。

「どうしたの？神様のくせしてその程度？」

「ふん。所詮田舎狐は狐だね」

「このまま殺してあげる」

さらに三人の腕が刃物になり八雲は、よける暇もなく背中と腹と脇腹を刺され口から血を吐き倒れてしまった。

「八雲さん！」

綱吉は、燐のポケの突っ込みを雪男に任せ再び下を見て悲鳴をあげる声に二人は、漫才を止め下を覗いた。

「八雲！大丈夫か？今助けに行くからな！」

「いけない、兄さん！」

「離せよ！雪男！」

「忘れたの兄さん！兄さんの正体は、秘密なんだよ？いくら今が夜でも危険だよ」

燐を羽交い締めにしていた雪男に綱吉は、ポケットから27と書かれた手袋をはめ死ぬ気弾を飲もうとしたが、それは、できなかった。

ぼんうん！

下から爆発の音を聞き三人は、騒ぎで起きたクロに乗り下に降りた。

降りて見たら八雲を残して三人組の少女たちがあなく代わりに黒く焦げた5？位の円があるだけだった。

「八雲！いったい何が会ったんだ？あいつらは？」
しかし八雲は、燐に何か言う前に倒れてしまった。

「八雲さん！！」

三人は、急いで倒れた八雲に向かったものの綱吉と燐は、ともかく雪男は、困っていた。

悪魔に対しての対処法は、分かるが何せ神だ。
分かる人は、いなかった。

「わぁ、本当に神様ですか？兄上の言うとおりずいぶんと魔力が低いですね」

「アマイモン！」

雪男は、素早く二丁拳銃を構え打ったが、弾はアマイモンにあた

ることなく後ろの木にめりこんだ。

「今日は、遊びに来たわけじゃないですよ。はい」

アマイモンは、ちらりと綱吉を見て燐に視線をもどし赤い紐で結ばれた音のならない鈴を燐に渡した。

「鈴？」

「はい、あの男の力の源が封じてある鈴です」

「…どうすればいいんだ」

「簡単です。契約者の血を垂らせば本来の力が戻り回復力も早まるはずです」

アマイモンの言葉に燐は、僅かだけ瞬時したが、目の前で苦しんでいる自分の友達に決心がつき歯で指を切り鈴に垂らした。それと同時に八雲の体が光輝きアマイモン曰く本当の姿を表した。肩辺りしかなかった髪が、腰まで伸び裂けて血み泥の巫女服から一定、動きやすく位の高さが伺える着物を着た、神々しい超絶美形がいた。

「ありがとう燐。おかげで助かったぞ」

四人（三人）は、さらに綺麗になった八雲の姿に唖然としていた。

「本

当に八雲ですか？」

「他に誰が居る？」

「さすが神ですね、凄い力を感じます…じゃ僕お使いが終わったので帰ります。燐、また虚無界に僕と遊び（殺しあい）に来て下さい」
アマイモンは、ぴょんと気が抜ける掛け声とともにどこかに消えてしまった。

「虚無界？」

「兄さんアマイモンは、いったい…」

綱吉の言葉に雪男は、眉間に皺を寄せじつとりと燐を見た。

「おお！もう朝か、んじゃ俺先に寝るな！」

綱吉の言葉に雪男は、眉間に皺を寄せじつとりと燐を見た。

「おお！もう朝か、んじゃ俺先に寝るな！」

「燐待つてよ！」

「兄さん話しがまだだよ」

燐は、目にも止まらない早さで寮に向かつのを綱吉は、慌てて後を追った。

「貴方の事は、明日聞きますからとりあえず帰って下さい」

「僕にこの様な態度するなどいいどきよだな」

八雲は、雪男を睨むと赤い炎が体を包み、炎が弱まるころには八雲

の姿は消えていた。

「……はあ、いったいこの学園で何が起こっているんですかね」

雪男のつぶ呟きは、誰もいなくなった森の奥に消えた。

オマケ

「ただいま戻りました、兄上」

「ご苦労」

「兄上」

「何だ」

「何で僕のヘビモスが猿轡をされて火に炙られているんですか？」

「ペットの躰くらいきちんとしなさい」

メフィストが指さした場所にアマイモンは見た、ヘビモスによって首が折れたメフィスト人形が無惨な姿を曝していた。

「わあ、兄上1920体が死んでる」

「なんだ1920体とは」

「僕が夢の中で兄上を殺した“死体”の数です」

「……………」

火やぶりにされたヘビモスを“美味し”かなと無表情で眺める愚弟にメフィストは、愛用の傘を構えた。

二人の転校生（前書き）

やっとやっと書けました！

最近暑くなって来ましたね、皆さんは大丈夫ですか？

クーラーが壊れてて扇風機と風で乗りきっている私は、ダウン寸前です。

それとこんな小説をお気に入りに登録してくれた方々に泣いて感謝しています。

内容的に次に憐憫われがある用な匂いがしますが、ありません！もしあったとしても“一部”だけです。

次いつ最新するか分かりませんが、なるべく早くできるように頑張ります。

最後に訳のわからない小説を見に来てくださってありがとうございます。

二人の転校生

昨日の一見から三人は、無言で身支度をしているのにたいし綱吉は、いつの間にか配られた制服と教科書の整理し、燐たちに後で来るといい良い先に行かせた。

「ツナ大丈夫かな？」

燐は、一人椅子に座り窓の外を眺めながら一緒に行けなかった友達の綱吉の心配をしていた。

燐が、うだうだ考えている間に朝のホームルームが終わり教師が教室に入って来た。

「早く席に着きなさい！ええ今日から転校生が来ますので皆さん仲良くして下さい」

教師の台詞に生徒たちは、とたんざわついた。

「転校生だって」

「この時期に遅くない？」

「どんな子が来るんだろうな？」

そんなざわついた教室に、教師は、もう一度「静かに！」との台詞に静まりかえつたのを確認すると転校生を入れさせた。

がらぁん…。

「え、ええと…て、転校生の沢田綱吉です、よ、よろしく願います！」

綱吉は、勢い良く頭を下げたが勢いありすぎて滑って転んでしまった。

一瞬静かになったが、次は、教室じゅうが笑いに満たされ綱吉は、赤くなった額よりさらに赤くなり急いで教師が、指定した席。隣の隣に座った。

「プププ、ツナ大丈夫か？」

「うう…笑わないでよ隣」

無事授業を終え隣は、いつも誰も居ない秘密の裏庭に綱吉と一緒に向かった。

「わあ、ずいぶん静かな所だね！」

「だろ？ここは、俺と“あいつら”しか知らない秘密の場所なんだ」

「凄いな、でもそんな所に俺なんか連れて良いの？」

「何言ってるんだよ！ツナは、俺の友達だろ？」

隣の“友達”と言う言葉に笑いながら綱吉は、早く食べようと購買と書いて戦場で何とか手に入れたパンと牛乳を掲げた。

「わりいな、あいつらがもう来る頃だから来たら食べようぜ」

隣の言葉に綱吉は、笑い待ち人を待ったが、すぐに現れたそれに疑

問を抱いた。

「……………犬？」

たれ目に瞼が紫で首にスカーフを付けたピンク色の可愛いらしいモップ犬に以前パイナップルが教えてくれた確か…スコッティ何とかと言う犬は、綱吉たちの方に真っ直ぐ向かった。

「今晚は、綱吉君。学園に馴れましたたか？」

「い、犬が喋った！！？」

綱吉は、驚愕の叫びをあげながら犬から数歩後ずさった。

「失礼な！こんな可愛い私を見て悲鳴をあげるとは！」

「いやあ、普通に何も知らない奴から見て喋る犬は、変だと思っぞメフィスト」

隣の台詞に綱吉は、目を剥いた。

「ええ！？この犬が昨日雪男さんが言ってた胡散臭い笑顔に加齢臭が漂ようドSの変人ですか??！」

「ふう！わ、わりい……………も…もう…だ…あははははは！！」

「……………(怒)」

綱吉は、雪男から聴いた説明に隣は、笑いこけメフィストは、その体に似合わないかつての野球好きの友達が見せる黒さよりも遙かにどす黒いオーラを漂わしているメフィストに綱吉は、小さく悲鳴をあげた。

「ククク…怒るなって、ブラシしてやるから」

「…燐が言うなら仕方ありませんねえ」

さっきまで毛を逆立てて黒いオーラを漂わしていたのが嘘の様に引つ込み代わりに燐のブラシに機嫌を良くした。

「さて、早く飯にするか！メフィストもここなら誰も見てねえから大丈夫だぜ」

「ふむ、そうですね」

メフィストは、燐の言葉に頷くとカウントをしポンツ！とピンクの煙が上がり煙がはれると長身のピエロに似た服を着た男が胡散臭い笑顔で立っていた。

「では、さっそく燐！あーん」

「調子こいているんじゃないか！ピエロが！」

「げふう！」

燐の拳が、メフィストの顎に辺り倒れるのを見た綱吉は、固まってしまう、そんな綱吉に燐は、笑い一緒に食べようと言ったが…。

「奥村燐の弁当いただきます」

燐が、食べようとしていた弁当は、いつの間にか居たアマイモンが、弁当の中身を食べる様を燐と綱吉は、啞然と見ていた。

「（もぎゅもぎゅ）じくん、じちそうさまでした」

アマイモンは、合掌するて燐に弁当を戻し燐は、空の弁当を眺め俯いてしまい、綱吉は、あまりの仕打ちに慰めようとしたが。

「か……せ……」

「？、何ですか燐？？」

アマイモンは、燐の顔を覗くのを見て綱吉は、ボンゴレブラット・オフ・ボンゴレの血の超直感が警報を鳴らしているのに気づき綱吉は、止めようとしたが……。

「俺の弁当返しやがれ！糞餓鬼があー！」

「遊んでくれるのですか？」

燐の怒気にアマイモンは、臆するどころかウキウキした表情で燐に向かった。

綱吉は、しばらく続く殺し合いにあの最強の二人を何となく沸騰させる彼らを見無視し一人安全な場所まで避難し弁当を寂しく食べた。メフィストは、そのまま放置されたままだが……。

「で、雪男の所にも転校生が来たんだって？」

「…ええ、貴方も良く知っている人間の血縁者ですよ」

「だから誰？」

「アーサー・O・エンジェルの血縁者ですよ」

「うげえ！あのロン毛の血縁者？てか、彼奴に家族いたのか？」

「あの…アーサーって言う人は、誰ですか？」

綱吉の質問にメフィストは、答えた。

「ああ綱吉君は、知りませんでしたっけ。彼は、被魔師の称号で聖騎士ラティンに位置する男ですよ」

「それは凄いのですか？」

「凄いも何も四大騎士アーックナイトの上にありますよ…まあ私には、及びませんがねえ」

「兄上、そんな話しは良いですから早く血縁者の写真見せて下さい」

「お前…また勝手に私の書類を漁ったな…まあいいがこの二枚の写真を見て下さい」

メフィストは、二枚の写真を見せた。三人は顔を寄せ、写真に映っているある一枚を見て固まってしまった。

「……本当にこの写真と同一人物か？」

「こ…個性のある顔ですね…」

「兄上、何ですか？この化け物は??」

「…彼女の名前は、アーサ・O・アリアと言いました。アーサのコネで上一級被魔師になった名ばかりの役立つです。左側の写真は、目眩ましの道具を着けていない素の姿で左側は、している姿です」

網吉たちはもう一度写真を見た。これでもかとケバい化粧品にもはや化粧品を馬鹿にしているとしか思えない酷い顔にアマイモンは、無表情の顔を珍しく歪めた。

「兄上…こいつ人間ですか？化け物の間違いでしょ？」

「そうだぜメフィ。本当にこれとロン毛の血が繋がっているのか？間違いじゃねえ??」

「信じられませんが間違いなく二人の血は繋がってます」

「メフィストさん、これがどうかしましたか？」

網吉の言葉にメフィストは、本来の目的がずれているのに気づくと一度咳払いをし注意を自分に向けさせた。

「皆さんに注意したい事があつたきました」

「注意したいこと？」

「彼女から昨日の輩と同じ“天使”の気配がしましたからです」

「天使？あのCMに出て来る小さな羽を生やした裸の赤ん坊だろ？」

「天使って美味しいんですか？」

「メフィストさんの言ってる天使と二人が思っているのとは、違う」

「と思いますよ？」

「その通りです綱吉君。燐、貴方の思っている天使と現実の天使とは少し違いますしアマイモン、天使は食べられませんよ」

メフィストは、とりあえず天使については、また後と言い最後に「何があっても近づくな」と言い燐といると駄々を捏ねるアマイモンを引きずり去ってしまった。

「燐、もうすぐ授業のチャイムが鳴るから早く教室にもどろ？」

「ええ！面倒くせえからヤダ！！」

燐のサボるとの一点張りにため息を着くと燐の隣に座り一緒にサボることにした。

転校初日からどうかと思うが、燐ともうしばらく居たいため残った綱吉に燐は、微笑みこれから起こる“何か”に警戒しながらこんな日々が続く事を願った。

それぞれの思惑（前書き）

今回ののは、本編を大分離れてしまっていました。本編で明かされていない登場人物たちの考えが明らかになります。

ちなみにオリジナルキャラクターも出ます。

青エクの漫画やテレビで見たイメージが、壊したくない人は次の話
しまで我慢してください。 酷お!?

それぞれの思惑

虚無界側

物質界と対になっている裏の世界。虚無界。

そこに構える大きな城の王の間に一人の男と男女の悪魔がいた。

「ふふふ…これで最後だ！」

男は、指にサイコロ似た物を緑の盤の上に叩きつけた。

「ほい、天鳳だ！」

「がああ！また負けたあ！おい、生臭坊主…もう一度勝負だああ！
！」

「がはははは！！何度やつても無駄だとおもっぜえ、“サタン魔神”様？」

「うっせえ！俺様がもう一回うっせえたらもう一回だあ！！！」

悪魔。サタンは、人間離れた美貌を壮大に歪め男。藤本獅郎が、悪魔たちの創世者にして神でもあるサタンを鼻で笑った…しかも上から目線で。

「てめえ…俺様を馬鹿にするだけでなく見をろしたなあ？」

サタンは、怒り任せに机に乗せてあった麻雀セットと燐と雪男の写真（隠し撮り写真）を青の焰で燃やした。

「ああああ！？俺がこつそり物質界から持って来た麻雀セットと燐と雪男の写真がああ！！！！」

獅郎は、苦勞して雪男たちに見つからない様に隠れながらやっと思いで手に入れた写真を燃やされ膝をついた。

「おい、餓鬼：俺の命より大切な息子の写真を燃やした罪は、おめえぞ？」

地獄から這い上がった低い声がしたかと思うとゆらりと立ち上がったぶちギレた獅郎の顔を偶然見てしまったサタンの愛人は、青ざめ扉から逃げたがサタンは…。

「おもしれえ、もう一回殺してやるよ」

「はあ、やれるもんならやってみやがれえよ」

その言葉が合図になり青い焰が、王の間に広がった。

「……………でえ、これは何ですか？」

「いやあな、これはあいつが悪いんであつて俺様は、悪くないぞお？」

「ああ！てめえ汚いぞ！？もとはと言えばお前が息子たちの写真を燃やすのがいけねえんだぞ！！！」

「息子たちの写真？」

「（びくう）！」「」

「いや…これはだなあ、その…」

「ちょっと獅郎！？何で燐たちの写真があるならあるって言うてくれないのよ？！」「」

「く…ぐるじい…」

「おい…そんぐれえにしねえとそいつ、死ぬぜえ？」

「サタン！貴方も同罪ですよ？」

「俺様は、悪くねえ！！」

さつきからサタンを恐れもしないで叱っている蒼瞳に儂なげな顔、腰まである金色の髪を緩く結んでいる女性、燐と雪男の母親。ユリ・エギンその人だった。

「大体サタン！何で貴方は、燐の顔に似てるのよ！？今すぐ潰してやる！！」「」

「仕方ないだろ、俺様の血（焔）を唯一継いだ時期後継者なんだからよあ」「」

「だったらせめて“奥村”さんに似てくれたって良かったでしょ！

「？」

「ああ？あのホクロ…だっけ？あんなのが体身体あるキモい男よりピチピチの俺様の方が良いだろう？」

「今どきピチピチ何か言わないはよ！若作りが！！まだ気が弱くて弱虫で優しくしてへタレな奥村さんの方がまだましよ！」

「…お前、自分の旦那を誉めるかかけすのかどちらにしるよ」

「ユリ様、おちついてください」

「レヴィアタン！貴方も止めるの？」

いつの間にか居た薄い赤色の髪に紅の瞳をした少年は、緩く首をふった。

「いいえ、ユリ様。さっきベルフェゴールが偵察から帰って来て天界に不穏な動きがあるって言ってたよ」

「おお、レヴィアタン。まだ子供なのに凄いな！」

「俺を子供扱いするな！お前よりずうーと長生きだぞー！」

レヴィアタンは、自分の小さな頭をわしゃわしゃと撫でる獅郎を睨み付けコートで隠されている足の脛をおもいつき蹴った。

「いてえー！！」

「ぎゃははははー！！おめえユリの使い魔、“七つの大罪”。“嫉妬

のレヴィアタン”の気にしてること言うからそうなるんだよ!」

「…それで天使たちの様子は？」

「はい、物質界で最近流行っている“召喚”の儀式で“成功”した人間数人に憑依しましたが、ほとんどが下級です」

「ほお、あの“怠情のベルフェゴール”が調べたのか？」

「いえ、若君です」

「さっすが私の息子ね」

「…おめえに似てなくて本当に良かったぜえ」

「それってどう言うことよ!？」

サタンは、しばらく面白そうに二人の喧嘩を見ていたが、それに飽きて側に控えているレヴィアタンに言った。

「このまま調査を続ける、後、七つの大罪をユリの護衛に着ける」

「しかし…俺たちは、ユリ様の使い魔であるから勝手な行動はできないが？」

「俺様が着けるって言ったらつけやがれ」

「はあ、申し訳ありませんでした」

レヴィアタンは、サタンに謝罪すると消えてしまった。

しばらくレヴィアタンが消えた場所を見ていたが、物質界が天使たちに壊されてしまう前にサタンは、今後の対策を練るため今だ喧嘩をする二人に向かった。

その時姿見で写された燐を大人びた表情にした顔は、これから起こる“戦争”に、本物の燐ならけしてしない歪んだ笑みを浮かべていた。

天界側

「ミカエル様、中級天使のサラが、我々と同じ天使の名を持つ血縁者との接触に成功しました」

「そうか…他の天使たちはどうした？」

「はあ、人間の女と誓約したサラが我々言うとうりに動いてくれたおかげで馬鹿な人間共が儀式のおかげで憑依がしやすくなりました」

「何人物質界に行けた？」

「20名の下位天使と中級位が2人程です」

「それだけ行ければ充分だ…ところでエリス」

「はい、ミカエル様」

「私に合う器は、見つかったか？」

空ばかり眺めていたミカエルは、初めて温度を感じない冷たい銀色の瞳を上位天使に向けた。

「勿論です！この器がミカエル様の器になりうる人間です」

上位天使は、光輝く球体を作るとミカエルに渡した。
彼は、球体に写しだされた人間を眺めた。

「まだ子供ではないか」

「しかし、この人間には可能性がりますし純粋な心を持っており
います」

「ふうん…まあいいが、そろそろ異世界からの客人がくるから魔法
円を用意しろ」

「はい！直ちに他の天使
たちと一緒に準備に取りかかります」

上位天使は、尊敬する大天使の言葉に頬を染め慌てて召喚の儀式を
行うたも消えた。

ミカエルは、また一人空を眺めていた、かつて兄と二人で駆けつけた美
しい記憶に思いはせながら異世界を繋ぐ空間を作るため光と共に消
えてしまった。

燐側

「…やっと動いたか、待ちくたびれたぜえ」

「まさか燐が、擦れた人間だったなんて」

綱吉の言葉に燐は、理事長室に備えつけられているテーブルの上に
乗っており綱吉に、微笑んだ。

「まあな、俺が実際“悪魔だと気づいた”のは、メフィと会って2日位かな？」

「ええ、私も驚きましたよ。まだ悪魔として覚醒していないと思っ
ていましたし」

「あの時俺は、まだ餓鬼だったからな、青の焰は、忌々しいことに
藤本とお前で封じられたからな」

燐は、その時の事を思いだしたのか、幼さの残る顔を歪めた。

「それにしても奥村りっ」

「燐だ。次に名字で言ったら殺すぜえ？」

「…燐怖い」

「……………燐は、人間が好きじゃなかったんですか？」

「べつつに、覚醒しなかつたら今頃“打倒サタン”を掲げていたか
もしれないなあ…まあ今は、人間と違って悪魔は、俺を“けして裏
切らない”から好きだけど」

「例え貴方の事を“奥村燐”とではなく“サタンの落胤”や“時期
後継者”として見られてもですか？」

メフィストの言葉に燐は、鼻で笑った。

「言いたい奴には、言わせておけ、所詮その程度の奴等だ」

燐は、メイドが淹れてくれた、紅茶をで喉を潤している時メフィスの携帯がなり彼は、電話に出た。

「はいもしもし…はい…そうですね…分かりました、後は頼みましたよ」

「なあメフィ、誰から？」

「父上からです」

「まじでえ！？あいつ電話何かできるのか？似合わねえ！」

「今のところ獅郎に教えてもらい何とか電話とメールは、できるようになりました」

「虚無界って、人間界…つまり物質界とは表裏だよな？携帯なんか繋がるの？」

綱吉の疑問に燐が、答えた。

「繋がるぜえ？ただし相手の番号が分かってないと無理だけどなあ」

「ふうーん、俺何かに本当の正体や悪魔たちとの関係をばらしても良かったの？」

不安げな綱吉に燐は、楽しそうに笑った。

「当たり前だろ？ツナは、俺の“親友”だしそれに俺、ツナのこと好きだぜえ！」

「う、うええええ!？」

燐の言葉に絶叫した綱吉だが、メフィストとアマイモンは、必死の表情で燐に詰め寄った。

「燐! 私にも好きだと言ってください!!」

「僕のことは、愛してるって言ってください」

「アマイモン!!」

メフィストとアマイモンの低レベルのいい争いに綱吉は、まるであの二人がいるような錯覚を覚え頭を痛めてるのに対し燐は、理事長室の椅子に座り窓を見ながら天使たちにとって邪魔な自分をどの様にして始末するのか見物だと綺麗に笑った。

「さて……馬鹿な天使たちは、どうやって俺を殺すのか、お手並み拝見てしますかあ……」

マリア側

聖十字学園から自家用車で自宅に帰ったマリアは、下手な鼻歌を歌いながらキングサイズのベッドに座った。

「ふふ、今日は、楽しかったなあ」

マリアは、指に嵌めた指輪に暗い笑みで笑った。

「これさえあればマリアは、“何をしても”皆のお姫様だしきつと雪男君もマリアを愛してるから明日から恋人ね!」

マリアは、窓際を見て得意気に笑った。

「大丈夫よ、ちゃんと誓約通りに“奥村燐を壊して”あげるから…だから私の誓約も守ってね、天使様？」

マリアは、化粧を落とした不細工な顔で窓際を眺めた後、明日の学校と被魔熟に備え眠った。

窓ガラスには、二枚の白い翼を生やしたサラが、忌々しげにマリアを見ていた。

雪男側

彼は、今日1日ですいぶんやつれた顔で寮に向かっていった。

「うふう！ぎもち悪い…あの転校生…：体から酷い悪臭したのに何で皆は、気づかなかったのでしょうか…」

雪男は、やけに自分にべったりだった転校生を思いだし肩を落としました。

「皆は、あの顔と香水で何とも思わなかったんでしょうか？」

昼休みの時、兄の燐と一緒に昼を食べようと探していたら多くの取り巻きたちにちやほらされた悪臭を撒き散らしながら自分に不細工な笑顔で向かった時は、なんとか笑顔を向けられたが、本気で鼻を塞ぐこと思った程だ。

「たつく、俺は、兄さんと昼食べようと思ったのにあのゴミ女…いっつそ殺してやるつかあ？」

燐命のブラコンである雪男にとって兄意外の人間は眼中になく、兄

との幸せな一時を邪魔したゴミ女は、殺しても殺し足りない程自分のブラックリストのトップに君臨しているのだ。

「そう言えばゴミ女、兄さんを探していたな…何でだ？」

何故雪男が分かったかと言うと彼は、兄のことになると普段の倍は頭が回り感も働くるからだ。

「くう…！もし兄さんに何かしたらあの蛆虫…：生かしちゃおけねえ」

雪男の背後に黒いオーラをまとわりつかせ敬語がなくなり素で恐ろしい台詞を吐きながら、心のオワシスで癒すべく、寮に繋がる鍵を丁度目の前に合った扉の鍵穴に射し込んだ。

守護者登場（前書き）

はわわわわ！やっと守護者たちが現れました。

随分最新が遅くてすみません！

ネタの神様が、長々現れなくて遅くなりました。

なぜ、守護者たちを子供にしたかと言うと可愛いからです！

はうう、お持ち帰り

と、まあそんな分けて本編に入ります。

なるべく早く最新できる様にごんばります！

ちなみに雪ちゃんはお出ません。ごめんなさい。

守護者登場

それぞれの時間を過ごした燐たちは、学園が終わり熟の鍵を使い綱吉と犬バージヨンのメイと深緑色の猫になったアマといつの間にか居たクロと一緒に被魔熟に向かった。

「よお！皆、遅くなったな」

熟に入る前燐は、仮面を被り中に入るとあの転校生が、勝暦たちと一緒にいた…あの暦眉も。

「ほんまマリアさん可愛いや」

「猫好きですか？」

「す、凄い！マリアさん、俺は、貴方を尊敬しますわ！」

「…まあ凄いんじゃないの？」

燐は、そんな彼らを一瞬哀れみの目で見ていつもいるしえみの隣に座った。

「しえみ、お前は、あいつらと輪にくわらないのか？」

「う…うん、私…マリアさんとお友達になりたいと思ってるんだけど何か好きになれないの…何でかな？」

「ふうーん…それが当たりだよ」

「燐？」

「い、いやあ、何でもねえよ！それにシエラや雪男の奴は、まだ来ないのか」

「次は、シエラ先生の授業だから雪ちゃんの授業は、この次だよ？
後ね燐」

「何だ」

「さつきから気になってたんだけど、膝の上にいる犬と猫さんとその人は誰なの？」

燐は、しえみの台詞に慌てて自分の後ろにいた綱吉を紹介した。

「こいつは、昨日俺の友達になった沢田綱吉でこっちは…“家族”
だな」

「初めまして、沢田綱吉と言います」

「わあ！は、初めまして。私、守山しえみって言うの、よろしくね。
綱吉さん」

「ツナで良いですよ。俺もしえみちゃんて言うから」

「むう〜、呼び捨てで言うてよ！」

燐は、“彼ら”の次に好きな綱吉たちを微笑ましげに見ていた。

「お前ら皆席につけ」

霧隠シエラが、教室に入って来て皆が席に着くが後ろにいた綱吉は

難しい顔つきで転校生を見ていた。

「ツナどうしたんだ？」

「うん？何でもないよ」

さっきまでの微妙な顔から一転いつもの笑顔で前を向いた。

「そっか」

焯は、前を向きのシエラの授業を受けた。

「て、言う分けだから綱吉、お前確か魔障を受けてないのに悪魔が見えるんだっけ??」

「あの…魔障って何ですか？」

「なあ！お前悪魔が見えくせして魔障を知らないのかあ!？」

「ひい！すみません!！」

「…まあいいが、悪魔を見る方法はその悪魔から怪我等をおつことともう一つ、最初から霊力があつたかのどちらだ」

「俺：霊力なんかありませんよ？」

「そんなこと、私が知るわけないだろ？まあいいや、ところで綱吉、お前に手騎士テイマーとしての才能があるかどうか見るから前に来い」

「ティマー？」

「あんた本当に被魔師になる気あるの？手騎士^{ティマー}って言うのは、悪魔を召喚して戦う人のことで才能がないとなれないから結構貴重な人材なのよ」

「マリアさんって物知りなんやなあ」

「すごい！流石上一級被魔師やな」

「ふん、まあまあじゃないの？」

燐は、うるさそうに得意気に言うマリアを睨し立てる皆を眺めていたが、出雲が皆から少し離れたところで見ているのに気づいた。

「どうした磨眉、お前さっきまで勝磨たちといただらう？」

「…何か私好きになれないは…最初は、何とも思わなかったけどあの女、私のことただの引き立て役見たいに扱うから大っ嫌い！」

出雲の台詞に燐は、心中ではほくそ笑んだ。

「そっか…人間側で“見方が三人”もいて俺は、うれしいよ」

「ところで奥村！誰が磨眉よ！！」

「お前ら盛りがついた犬か！？授業中は、静かにしろ！ゴリアー！！」

シエラが、切れると騒がしかった教室が静かになり行きずらくなっ

た綱吉だが、シエラが早く来いと言われ渋々前に出た。

「ほれ、略式の紙だ。それに自分の血を滴して“好きな呪文”を言え」

綱吉は、シエラに小さな紙を渡されおどしたが、皆がこちらを見る視線に耐えきれず俯いた時…。

“自身を持って、綱吉”

「え???世???」
フリーモ

“ジョットで良い。綱吉：俺が言う呪文を添って言え”

「でも…」

“ここは、騙されたと思って信じてくれ”

「…分かりました、俺は、貴方を信じます」

急に俯いてぶつぶつ言う綱吉にシエラと隣と悪魔組としえみと出雲以外は、笑っていたが、綱吉が、顔をあげた時に見た表情にメフィストは酷く驚いた。

「（あの顔…あの表情は、まさか…!）」

「世界を守りし天候の王たちよ、“大空の王”の“誓約”により我の元に姿を変え現れたまえ！」

綱吉が、呪文を唱えながら針で刺した指から滴る血を略式ではなく

床に垂らすと大きな貝と細かい繊細な文字が浮かぶ上がった。

ぼん！…ぼてぼてぼてぼて…。

「ぐげえ！？」

光が強くなり軽い音と共に綱吉の頭上で小さい“何か”が落ちて来て綱吉の蛙が潰れた悲鳴とその正体に全員が啞然としていた。

「…子供？」

そう、なんと空から七人の子供が落ちてきたのだ、これで驚かない人がいるなら来て欲しい程だ。

「ちよつと恭弥！どこ触っているんですか！？」

「骸…君太った？」

「失礼ですよ、恭弥！いつまで触っているのですか！触るなら綱吉君にしなさい！！」

「うん、その時は、三人で3Pだね。勿論受けは、綱吉だ」

「てめえら！十代目に何と羨まし…じゃなくて恐れおおい事を、果てやがれ！！」

「あははは、獄寺お前本音ただ漏れだぜえ？（俺のツナに手を出してみる、お前ら三枚におろしてやる！）」

「が…ま…ん…うわああああ…！！！」

カオスだ…誰もがそう思ったが、しえみは今だ泣き続けるランボを慰めにカオス空間に一人で向かった。

「ほら、もう大丈夫だよ？」

「……………ぐすん」

しえみが、ランボをなだめるてる間に綱吉は、小さくなってしまった守護者達の元に向かった。

「皆！いったいどうやって来たの!？」

「メフィ、あいつら悪魔か？」

「いいえ、そんな反応はありませんでしたよ？」

「僕が、思うに綱吉が召喚する時に浮かび上がったあの模様が原因だと思います」

隣の質問に変化を解いたメフィストに抱きしめられながらそれを羨ましそうに見ていたアマイモンと交互に答えた。

「み、皆！何でそんなに小さくなったの!？」

「それが、十代目。俺たちにも良く分からないんです」

「小僧たちの力でぴゅーん行ってがらがらどんぴしゃだったんだぜ！」

「じめん山本…良く分からないよ」

何時もの山本感覚の説明に綱吉は、苦笑いしながらまだ状況説明ができる骸と雲雀に聞いた。

「僕たちは3日前に消えた綱吉を探すため赤ん坊の力で異世界を渡つたんだ」

「3日前!？」

自分がこの世界に来て3日立つのに向こうでも同じく3日しかたっていない現実に驚く綱吉を宥め次に骸がここまでの経緯を話した。

放浪の退治屋、ディーンとサム（前書き）

か、書けた…。

長い道のりだったです、最新が遅くてごめんなさい。やっとわけありの兄弟が、出されて嬉しいです。

ちなみに設定ですが。

燐は、色んな意味で最強です。

使い魔のほとんどが有名の上位悪魔たちで、虚無界の有力候補がほとんど居なくなるたも上位の悪魔を3体とソロモン72柱と誓約したソロモン王の指輪を持ってます。

サタ様は、燐が大好きの親バカで獅郎とは、親バカ仲間です。

ほとんどの被魔師たちは死後虚無界行きです。

アマとメフィは、燐ラブです。

以上、無駄に長い裏設定でした。

次いつ最新出来るか分かりませんが、気長に待ってください！

放浪の退治屋、ディーンとサム

綱吉は、雲雀と骸に自分のベッドの端まで追い詰められていた。

「お、落ち着いてください!」

「ねえ、綱吉…ヤろう」

「クフフ、あれだけ誘っておいて良く言えますね?」

「あれだけって何!?ズボンに紅茶を滴しちやたこと???!」

所詮一人用のベッドだ、等々綱吉の抵抗虚しく後ろに骸、前に雲雀が回りこんだ。

「い…嫌、止めて」

雲雀が綱吉の顔に近づき骸の手がベルトに当たり。

・
・
・

「ぎゃあああああ　　!!なんの話しをしてる!?それ3日前所かさらに前の話しで…て、何言わせるんですか!!!」

「なにつて?ナニだよ」

「止めてください!皆が貴方を雲雀恭弥だと思わなくなりますよ!

「？」
「クフ、あの時の君は、可愛かったですよ？最後なんかもつと腰を」

「それい以上言ってみろ、お前の房を燃やしてやるからな！！」

「極限！ここは、何処だ！？」

「京子ちゃんのお兄さん！貴方いったい何処にいたんですか！？」

「じゅ、十代目のあんなことやこんな所……ぐはぁ！」

「くそ！アヒルと果汁に先を越された！！（あははは！獄寺は、むつつりなのな）」

「がはははは！ランボさんも入れさせろ！」

「あ、待って！ランボ君」

さらに収集がつかなくなった空間に皆は、綱吉の呪文と共に現れた知り合いの子供だが、らしからぬ言葉を吐く子供に唾然としてたが、あまりにも騒ぐ状況を理解してないシエラがブチ切れた。

「てめえ綱吉！状況説明しろ！おりゃ！！」

「それより君たち強いのか？」

「待ちなさい恭弥、なぜ僕たちがどうやってこの世界に来たか話してから戦ってください」

艶やかな黒髪の子供が、両手に光輝く細い棒を持ってシエラたちに向かうのを燐と同じ髪色に独自の髪型をした、子供が止めていた。

「君が10日どころか3日も戻ってこないで10年バズーカの故障だと分かったアルコバレーノが、ジャンニーニに頼んで改良したバズーカとここ世界に合わせる為に七人のアルコバレーノが集まって送ったのです」

「それにしても何で皆子供になってるの？」

綱吉の疑問に自称十代目の右腕が、説明しようとした時。

「あらぁん。」

いきなり被魔塾に見知らない男女が入って来た。

「何だ、お前たちも被魔師希望者か？」

シエラが、入って来た男女二名に近づいた時、綱吉の超超感の警報に気づき止めようと駆け寄った。

「シエラさん！近づいちゃ行けません！！」

「綱吉？いつたいどうし…」

シエラが、最後まで言う前に彼女の腹を男の手が貫通していた。

「シエラさん！」

雪男は、しえみたちの悲鳴が混じりながらも腰のホルダーから二丁拳銃をだすと二人から離れたシエラに続き躊躇いなく打った。

だが、銃弾は、天使に当たることなく体にめり込んだだけだった。

「無駄無駄よ！そんな玩具で私たちを殺そうと言うの？」

「俺たちは、天使だぜ？そんな悪魔用の武器が効くわけないだろ」

雪男とシエラは、苦虫を噛み潰した様な顔で後ろの隣たちを守るため前に出て天使と名乗る二人組を睨んだ。

もはや打つ手がなたいと誰もが思い隣も観察していたが、所詮シエラも雪男もその程度だと見切り首にかけてあるサファイア色の石に手をかけようとした時に起こった。二人組のライフルを持ったかっこいい二人組の男がいた。

「正義のヒーローデイン&サム登場！」

「…デイン、恥ずかしくないか？」

「馬鹿だなあ、お前は！こういう子供たちがピンチの時に駆けつけるのが、ヒーローだろ？」

「……」

「あ、こら、俺を無視するな！」

シエラたちだけでなく自分の使い魔を召喚しようとした手を首飾りから離し、今だに毛を逆立てているクロの頭をなぜ自分に抱きついているメフィが抜け出し少し離れた所に移動していた。

勿論それに気づいたアマなメフィは、彼の左右隣に座った。

綱吉もシエラの傷を心配そうに見ていたが、異常がないと分かり安堵すると止めに臨時体制の守護者たちと突如現れた二人組を見た。

「俺たちが、いるからもう大丈夫だぞ」

二人組のうち背が少し低いディーンと言う男が、ライフルを持ったまんま燐たちに安心させる様に笑った。

外伝 (前編) (前書き)

以前の失敗を踏まえ急ピッチで書きました。

謎だったメフィストとジョットの謎をこの小説で書こうと思います。完結までまだまだかかりませんが、どうか空より広い心でこれからも見に来てください。

それでは、また会いましょう。

外伝（前編）

イタリアの表通りにカボチャパンツに白いシルクハットに顎髭を生やした紳士風の男が鼻息を歌いながら通っていた。

「やはり物質界に来て正解でした。虚無界にはない玩具箱がいつぱいですね」

しかし男は、ふと、奥から銃声や何かを殴る音がして自宅に向かう足をそちらに向けた。

そして音のした方向に向かった男は、そこであり得ない景色に息を飲む。

「…燈色の炎？」

囲まれている男たちより華奢な男が、額とエンブレムの付いたグロ―ブに火を灯し戦っていた。

しばらくしてある程度刺客を片付けた男は、ぱちぱちと手を叩く音に顔を向けると胡散臭い笑顔を浮かべた男が立っていた。

「素晴らしいです！見事な戦っぶりでしたよ」

「誰だ」

「おっと、申し遅れました。私の名は、ヨハン・ファウストと言います。以後お見知りおきよ」

「…嘘だな、それは、貴様の本当の名前じゃないだろ？」

「……ほお、何故そうおもいます？」

「勘だ」

男は、炎を灯す男の断言的な言葉に啞然としていたが、込み上げる笑いを耐えきれなくなつて笑つた。

「アハハハハ！勘、ですか…そんなこと初めて言われましたよ」

「……」

「ぷくく…あゝ笑つた笑つた。久しぶりに私を笑わせましたから答えを言いましょ…正解です！」

ヨハンの背後でクラッカーや鳩などを出して胡散臭い笑顔で笑つていたが、不思議な力を持つ男は、そんな彼に無表情に近い表情を緩めた。

「貴様の胡散臭い笑顔を見てると“霧”を思いだすな」

「霧？霧とは言つたい…」

「それより名前が先だ」

「分かりました。あらためて言いましょう、私の名前は、メフィステ・フェレスと言います」

「皆は、？世フーモと呼ぶが、守護者ではジヨット呼ぶ。だからジヨットと良い」

「それでは、ジヨット、失礼ながら一つ質問してもよろしいですか

「？」

「構わない」

「貴方の出していた炎は、何ですか？見たところ何か意志が込もっている様に見えたんですが」

「そうだ、産まれた時には、既に備わっていた。」

「では最後に…青の炎を見たことは、ありますか？」

「青の炎？バーナーの温度を下げた時になる火のことか」

「知らないのならいいです。変なことを聞いてすみませんでした」

メフィストがそこから去るとしたが、ジョットが彼の腕を掴んで止めた。

「何です」

「私と友達になってくれ」

「……は？」

メフィストは、ジョットの友達宣告に彼には、珍しく間抜けな顔をさらした。

「もう少し早ければ私の霧になったのだが、あいにく先客が居るから無理だ。だからせめて私の友達になれ」

「何故私が、貴方と友達にならなくてはいけないのですか？」

「私の超直勤が、今を逃すとお前に会えないと言っている」

「便利な勤ですね、貴方本当に人気ですか？」

メフィストの揶揄った台詞にジヨットは、一瞬悲しげな顔をしたが、直ぐに無表情に戻った。

「私は、人間だ」

「はあ…、分かりました、私が悪かったです。ですから手を離してくださいませんか？さっきからミシミシ言ってるんで」

「…悪かったな」

ジヨットの掴んでいた自分の腕を振りほどき引き寄せスーツの裾を捲った。

病的までに白い肌には、ジヨットの手形が、青アザになりくつきりと浮かんでいた。

「すまなかった。痛むか？」

「…心配には、及びませんよ。この程度なら直ぐに治りますんで」

「直ぐ治るって、どう見ても内側からうつ血してるぞ？」

しかしジヨットのすまなそうな顔が、驚愕に変わった。

「傷が、治っている…どう言うことだ」

「私は、人間ではありません。悪魔と呼ばれる存在です」

「悪魔だと」

「はい、あらゆる天体に天文学、哲学等を人間に教えた大公です」

メフィストが、本当の自分をばらし尖った牙やや耳を出すとジヨットは、黙ってしまった。

それにメフィストは、面白そうに見ていたが。

「凄いぞ！本当に悪魔が居たんだな！！」

「は、はあ？貴方は、私が悪魔だと真じているのですか？怖くないのですか？？」

「何を言うか！私の様に火を出せる人間がいるなら悪魔がいたって変ではないだろ？」

清々しいまでのジヨットの言葉にメフィストは、今だ、頭の処理が追いつかず混乱していた。

「し、しかし仮にも私が、悪魔だったら普通の人間は、逃げますよ

「よし、決まりだな。ああG私だ、直ぐ迎えに来てくれ」

「ちよっ、無視ですか！私は、まだ貴方の友達になるとはいつてませんしついで行くともいつてませんよ！」

「呼んだか、ジヨット」

「早！？ジヨットが呼び出してからまだ3分しかたっていないよ？」

「ああ、こいつの体に小型の発信器を付けていたから発信元を辿って来ただけだよ」

「むう、気づかなかったぞ！Gは、何時から私のストーカーになったのだ」

「お前が、いつもいつも逃げるからだろうが！！」

「一週間も缶詰状態だったんだぞ！少し羽目外してもバチは、当たらないだろ！？」

「それで1ヶ月も開けさらに資料を山に変えたばかりだぞ！！」
ギヤアギヤアと騒ぐジヨットと顔に刺青を施した赤い髪の青年と喧嘩してる今が、チャンスとばかり気配をけしさるうとしたが、体いつの間にか白い縄で結ばれていた。

「な！力が抜けていく！？」

「ふふふ、やはり効いたか、私の守護者たちの中でやたらそっぴけいに詳しい男から貰ったんだが…効果はいい見たいだな」

「おい、ジヨット。こいつを連れてけばいいのか？」

「ああ、喜べメフィスト。今から私の家族だ！」

「なあ！！！？」

メフィストは、白い縄でグルグル巻きになりながら車の後部座席で何故かジヨットに膝枕をされていた。

「縄を解いてください」

「駄目だ、そんなことをしたら逃げるだろ？」

「一般人を誘拐とは…犯罪ですよ？」

「メフィストは、悪魔だろ？犯罪も何もないでは、ないか。それに私は、イタリア最大の組織ボンゴレのボスだ」

メフィストは、初めて無表情の顔に憎らしい程の目映い笑顔に毒気を抜かれ仕方なく何故か心地よいジヨットの膝枕で寝ることにし目を閉じた。

「…所詮人間など儂い下等な生き物です。たかが数年、退屈しのぎに友達ごっこに付き合っただけですよ」

メフィストは、心の中でそう言うと久しぶりの深い眠りに着いた。

外伝（中編）（前書き）

書けました！嬉しいです。

足りないところの補充ですが、リポーンでは継承式編終わってます。青エクは、京都に入る前です。

ちなみに省エネサタン様は、燐の子どもバージョンだと思ってください。

なぜサタンが、憑依もなく物質界に入られる理由はジョットのボンゴレリングの力を借りてるからです。

次で外伝が終わり本編になります。

いつ最新できるか分かりませんが、気長に待つてください！

最後に？世ファミリーのキャラが壊れますしメフィとGが、苦勞人と書いて被害者と言います。

アラ様に微かにシヨタの香りがします。

それでも見てやるよと言う人は、どうぞ楽しんでください！

外伝（中編）

Gの運転する車で寝ていたメフィストは、ジヨットに起こされやら大きな屋敷に案内された。

「随分と大きな屋敷ですね」

「裏社会でボンゴレを知らない人間なんかいないぜ」

メフィストの感想にGは、説明していたが、背後からの殺気にメフィストやGが、その場で飛びずさるのに対し殺気にを向けられたジヨットは、落ち着いた態度で迫る手錠をマントで跳ね返した。

「相変わらずの挨拶だな、アラウディ」

「君こそどうしてこんな怪しい男を連れて来たの」

白銀の髪に冷たい印象を受ける青い瞳、腰ぐらいのコートを羽織り手に手錠を構えた美青年がジヨットを睨み付けていた。

「彼は、ここの家族になったのだ。だから仲良くしろよ？」

「そんなの知らないしその男見ると苛つく」

「お前：相変わらずスピードのこと嫌いだな」

「あんな男の名前出さないでくれる？虫酸が走るから」

「彼は、誰ですか？」

「あいつの名前は、アラウディ。 “孤高の浮き雲” でジヨットの雲の守護者にして “ボンゴレ最強” の男だ」

「とにかく僕は、その男が気に入くわないから認めないし僕は、君の家族になった覚えはないよ。」

アラウディは、メフィストをちらりと流し見て去っていく背中にジヨットは、ため息をついた。

「すまなかつたな、もし気分を悪くしたなら謝るぞ」

「別に気にしてませんし慣れてます。とこでスピードとは誰ですか？」

「ジヨットの霧の守護者だ。いつも胡散臭い笑みにお前の様な独自のセンスを持った、男だよ」

「この服は、私なりの正装なのですが？」

「…噂をすれば影って奴だな」

廊下で足音がしてメフィストとジヨットは、Gの向けてる方向に視線を向けた。

「何ですかG、その目は、言いたいことがあるなら言いなさい」

ジヨットは、背後の二人の会話に聞こえないフリをしながらこちらに近づいたD・スピードにメフィストを紹介した。

「変な服ですねピエロですか？」

「…（怒）貴様の頭よりは、普通だと思っただがね？果実さん？」

「又ハハハハハ！…どうやら死にたい見たいですね？鉄面皮男から先に片付けようと思いましたが、予定変更です」

「面白い！殺れるものならやって見てください」

二人（一人）からとても人間が出せるとは、思わない殺気が吹き出し流石のGも少し後退ったが、ジョットだけは、違った。

「スピード…私が定めた“絶対してはいけない誓い”を破ったな」

二人よりさらに強い殺気を通りこして冷気さえ漂よわしているジョットにGは、顔面蒼白になり二人の頑丈さを真じてそこから離れた。

「は！しまった」

「ふん、私の凄さが分かりましたか？」

メフィストは、顔面蒼白になったスピードを鼻で笑ったが、その視線が自分じゃなく後ろに集中しているのに気づき、ゆっくり振り返って…直ぐ前に戻した。

「（怖！後ろに父上に匹敵する魔王がいます。ここ物質界でしたよね??）」

「お、お、落ち着いてくださいじよ、ジョット！彼は、家族じゃないんですよね？だったら貴方が作った絶対してはいけない誓いの内“家族同士で喧嘩するな”に触れてませんよ!？」

「さつきも言ったが、メフィストは、私の家族だ。家族同士の争いを止めるのも私の責任だろ？」

「さつき！？そんなこと今知りましたよ！！？」

「問答無用！」

ただいま大変お見せできない過激なお仕置きが、なされてるためお見せできません。

しばらくお待ちください。

・

・

・

「と、言う分けだから皆もメフィストと仲良くしてくれ」

「こら待てジヨット！いつの間にお前ら部屋にいるんだ。確かまだ玄関側だったよな！？」

「面倒だから飛ばした」

「普通飛ばすか！？」

「文句なら管理人に言え」

「だから管理人って誰だよ！？」

そんな漫才をする二人を放置して遠く離れた極地に位置する日本と呼ばれる国のやけに裾がヒラヒラした服を着た男が、にこやかな笑顔で優雅にお茶を飲むメフィストに近づいた。

「浅利雨月と言つてござる。メフィスト殿は、悪魔でござるな？拙者初めて見たでござる！」

「何故私が、悪魔だと？」

「ジヨット殿が、自慢げに言つてたでござる」

「言つときますが、私は、悪魔ではありませんしそんなあの男のでたらめです」

「すまぬが、試していいでござるか？」

メフィストが、何がと言つ前に雨月は、横縦と空に指を切っていた。

「臨・兵・闘・者！」

雲月が魔除けの印を結んでるのにメフィストだけでなくこの部屋にいるほぼ全員が雲月を見ていた。

「皆・人・列！」

印を切り終わりしばらくして雲月は、メフィストを見たが、変化がないのに首を傾げた。

「おかしいな？これできくはずでござるに」

「…おかしなのは、貴方の頭です。それより私を悪魔呼びしたこと謝ってください」

「究極に悪魔には聖書が聴くときいたぞ」

ガタイのいい神父服を着た男が、何時も持っていた聖書を開いて読みあげようとしたが、背後に迫る手錠を避けるために慌てて離れた。

「危ないではないか！」

「君たち風紀見出し過ぎだよ…噛み殺す！」

「待てアラウデイ！その台詞は、禁止ワールドだぞ！！」

「又ハハハハ！！そろそろ私の出番ですね！」

「てめえは来るな！余計話しがややくしくなるは！？」

「ジヨット〜！またランポウさんが何で前線に出なきゃ…ぶべえ！？」

「すまないランポウ…究極に許してくれ」

「皆さんの様子がおかしいですね」

メフィストは、尋常じゃない喧嘩に違和感を持ち僅かばかり悪魔の気配を感知し気配の元を辿ったら意外な人物から出ていた。

「何やってるんですか、ジヨット？」

「…グズ、Gが書類をやらなければ私の楽しみにしていたカスタードプリンを捨てると言ったのだぞ！だから私はGに復習することにしたのだ！」

「喧嘩の理由がそれですか！？最初から随分とずれてますよ？てか、何を呼び出そうとしてるのですか！？」

「やはり悪魔召喚に付き物の魔王を呼んでGを1ヶ月剥げにさせようと思ったのだ」

「貴方馬鹿ですか！！媚びに何か付けても可愛くありません。そんなことでサタンを呼ぼうとしてるんですか！？」

メフィストは、何やら怪しげな魔法円の上で呪文を唱えようとする。ジヨットの元に向かい儀式を辞めさせるべく呪文を唱えた。

「罪深き羊に睡眠スリープを！」

「出でよさ…た…ん」

しかしメフィストの努力むなしくジヨットが、最後まで召喚の呪文を言ったとたんに魔法円が、光輝いた。

「ぎゃはははは！！まさかこの俺様を召喚するほどの人間が居るとはな？メフィスト？」

メフィストは、この声に聞き覚えがあった。

しかし煙が晴れ召喚されたサタンの姿に彼は啞然としていた。

「ち、父上ですか？」

「他に誰がいるんだ？」

確かに自分の父にして悪魔たちの神サタンだが、何故か5才くらいの男の子の姿になっていた。

「おお！俺様はやっぱりどんな姿でもかっけえな」

サタンは、そこら辺にあった鏡で自分の姿に満足げにうなずいていた。

「究極に俺は、なにをしていたのだ？」

「あり？拙者は今までなにをしていたでござるか？？」

「私、いつの間ここに居たのでしょうか？」

「……っ！僕の中に誰か入ったね…！見つけしだい逮捕だよ」

「……………」

それぞれ元に戻ったのにメフィストは、なんとなく安堵したが最後の一人の悲鳴に皆はそちらに視線をやった。

「ぎゃあああああ！！俺の髪がないいい！！？」

「ぶははは！！何だその頭は！ゴブ 見たいじゃねえか！」

この世の終わりの様な顔をしている頭が禿げて代わりに触角が生えていた。

見るも無残なGの変わりようにあるものは、笑いまたあるものは十字を切り各々が憐れみな視線を向けてる中子どもになったサタンの下品な笑い声だけが、部屋に響いていた。

「ははははは！思い知ったか、G…だが髪が無くともその触角は、可愛いぞ！」

「……………」

いい笑顔で無責任なことを言うジヨットにブチィ！と何かが切れる音がした。

「…てめえジヨット！今日という今日はゆるさない！殺す！！」

「何だ？殺し合いか？…だったら俺様も混ぜやがれえ！！」

般若の形相で愛用の弓矢をアーチャージヨットに構え躊躇いなく打った。

勿論雲と霧の次に最強の大空にきくはずもなく二人で死ぬ気の鬼ごっこをして、初めての無質界に召喚されたサタンは、面白いことに目がないため部屋から出る二人の後を目にも止まらない速さで追いかけて行った。

「父上…省エネの体なのに凄いですね」

メフィストは、サタンを召喚した魔法円が消えることに気づきため息をついた。

「私…物質界に来たのが、間違いでしたでしょうか？」

「……………」

「アラウデイ、貴方自分の身分を知らない分けじゃないですよね？」
しかしアラウデイは、止めるスペードを幾重もの手錠で縛りあげるとジョットたちの後を追った。

「アラウデイ殿！子どもに手をだしては行けないでござる……！」

「何！それは、神を冒瀆する行いではないか！何故もつと早く言わん……！」

「待って！俺っちもいくもんね！」

部屋から白い道化師クラウン意外がない部屋でめったにしないため息をまた一つついた。

「……虚無界が、懐かしいと思うのはなぜでしょうか」

メフィストは、なぜか目頭が熱くなったがその理由が知りたくないためそつと目を閉じた。

しかしこれがまだ序曲だとはその時のメフィストは、知らなかった。

外伝（後編）（前書き）

外伝終わりました！ながら放置してしまい申し訳ありませんでした。次々から本編に入ります。楽しみして下さい！
色々偽造がされてますので気をつけて下さい。

外伝（後編）

やっとの思いでジヨットの死ぬ気の鬼ごっこは、アラウデイの子どもの教育に良くないと言う理由で裏庭の木に吊るしたことにより幕を閉じた。

「そこで反省してなよ」

「俺は悪くねえ！」

「…私は皆の上司だぞ？」

「こんな小さな子どもを巻き込むからだろ？しばらくそこで反省してな」

「俺様を子ども扱いするんじゃない！」

「……」

「頭も撫でるな！！」

アラウデイは、サタンを抱き上げると無表情の顔が綻び、さらさらの髪を撫でた。

「……っ！こっとなったら皆焼き殺してやるよ！！」

サタンは、自分のからから青い炎をだしたがマッチ位の威力しかな

かった。

「何でだ!?!」

「綺麗な炎だね、どうやって出したの?」

「俺様はサタン様だぞ!悪魔たちの神だぞ!」

「サタン?悪魔たちの神?君頭大丈夫?後、その名前あいつを思い出すから僕が着けてあげる」

「止める!サタンで良い!」

「そうだな…アクア何てどお?可愛い君にぴったりだ」

「だから俺様は!」

「何?僕の決めたことに文句があるの」

アラウディからの殺気にサタンは、冷や汗を流した。

普段の彼ならば対したことはないかが、力を封じられている今の姿ではいくら虚無界の神でもひとたまりもない。

「アクアでいい…です」

「決まりだね」

木に吊るされたGと自身の縄を解いたジョットは、サタン改めてアクアと名付けられた子どもに同情の目を向けた。

「あ！ジヨットてめえいつの間に縄をほどいたんだ！？」

「Gが、ミノムシになってあがいてる間に縄抜けを使った」

「お前はマジヤンか！？」

「マジヤンではないジヨットだ！」

「一生言ってる！」

言い争う二人だったが、土煙をあげながらこちらに凄い形相でアラウディに向かう守護者たちを二人は、喧嘩も止めて奇異な目で追った。

「アラウディ！はやまるな！」

「アラウディ殿！子どもに手をだしてはいけないうござるよ！！」

「はあ…た…待ってだ、もん…はあ、はあ…」

「アラウディ！その子どもに何もしてませんね！？なにかしたら殺されますよ！！」

「それ以上近づいたら…」

全員でアラウディが、抱いている子どもを何とか保護しようとしたが深い落とし穴に悲鳴をあげながら落ちて行った。

「…落とし穴があるからあぶないよと言ったのに馬鹿なの？それにこの子どもは僕とジヨットの愛の結晶だから問題ないよ」

「はあ！？愛の結晶！！君たちそんな中だったのですか！??」

「むう、愛の結晶とは何がだ？」

「待ちなさい！その子は、私とジヨットの子どもです。返しなさい
！！」

「そのまま死んでくれたら良かったのに」

アラウデイの蔑みの視線にスペードの額の血管が切れる音がした。

「…遺言はそれだけですか？」

「遺言？それは、君の方だろ」

「おい、こら！俺様を餓鬼扱いするんじゃないやねえ！！てめえらの数倍は年が上だぞ！」

「……………」

「だから頭を撫でるなああ ……！！！」

「凄い…あのサタンを子ども扱いどころか頭を撫でるんなんて」

いくらサタンが、子どもになったとは言えメフィストは、進んで触るうとは思わないしその後の往復を思えば放置するに限るのだ。

「な、何で俺っちアラウデイに抱えられてるもんね!？」

「ちょっとダブル稲妻分け目！アクアを返しなよ」

さっきまで腕の中にいたサタンがいなく変わりにランポウを抱き抱えていたのにアラウディは、眉を潜め膝でランポウの背中をくの字にした。

バキグキベキバキ！！

「ぶべえ！…が…ま…」

しかしランポウはお決まりの台詞を言う前に気絶してしまった…しかも白目向いて泡を口から吹いていた。

「汚い」

アラウディは、そう言うとランポウを池に放り投げるところを見た守護者とメフィストは、見なかったことにした。

「又ハハハハ！！全くお馬鹿さんたちですね」

「…ぐ、ぐるじい…」

スピードは、ジヨットたちから離れるためサタンを横抱きにしたが、あまりにの締め付けに顔を青白させうめいていた。

「おい、俺様をどこに連れて行くきだ？」

「何って？ジヨットと式を挙げるための準備していい間に貴方を僕の部屋に隠します」

「そう言えば白髪もそんなこと言ってたな？お前らジヨットの何だ？」

サタンの言葉にスペードは悲しげな顔をした。

「ただの守護者ですよ」

サタンは分からなかった。

スペードが悲しげに笑うと何故かサタンは、体の底から沸き上がる感情に困惑していた。

「ヤつちまえば良いだろそんなの、何で遠慮するんだ？」

悪魔は快楽に順々だ。

その王であり神でもあるサタンが、望めば何でも手に入るし自分を否定すり者などいない。それどころか悪魔の方から媚びを売るくらいだ。

「別に虚無界には法則なんかねえ。下級の悪魔はそれこそ突っ込む穴さえあれば魔獣とするくらいだ、それが野郎同士でもやってるぜ？」

「…貴方の故郷は随分と秩序が乱れてますね」

「悪魔なんてそんなもんだろ？まあ中級は微妙だが上級クラスはなりふり構わず盛らねえがな」

ギヤハハハとサタンの笑い声にスペードは、歩みを止めさつきから気になっていたことを言った。

「さつきから気になっていたのですが虚無界とは何ですか？それにサタンだと…」

「やっと聞いたか、虚無界は物質界と表裏一体になっていてそこに悪魔が住んでいる。ちなみに俺様は悪魔たちを作った魔王にして神サタンだ！！」

横抱きにされたままだがサタンが声高く言った言葉にスピードは、固まってしまった。

「はあ！分かったら、今から止まって土下座するなら許してやるよ」
しかしスピードは。

「では貴方が本当にサタンならどうしてここに居るのですか？」

「今度は俺様の話しを無視か…ジヨットが召喚したからだ。しかし俺様を使い魔にする程の強力な被魔師は初めてだ」

「？世は被魔師ではありませんよ？彼は人には見えない者が見えるせいか普通いじめられますよね？」

「彼、殺られたえげつない方法で100倍にして返すたちですからいじめの心配はありませんでした」

「何でてめえが知ってるんだ？」

「前にジヨットがいきなり守護者を呼び出して暴露したからです」

その時のことを思い出したのかスピードはその場に止まり勢なり止

まるのを不思議そうにサタンは下におり顔を覗いたら遠い目をしていた。

「本当にいきなりでしたからね…雷は入浴中のところを嵐は調査任務中に雨は稽古中に晴れは…ミサがあるから諦め雲は仮眠の時に私は……」

しかしスピードは何故か自分の事を言わないままさらにその時の話しをした。

「とにかくジヨットは、全くといっていいほど気まぐれで相手の都合を考えない人間なんです」

スピードの言葉にサタンはなるほどって納得した。

「それでもなぜでしょうか…彼を憎めないんですよ」

サタンが何か言う前に自分の胸当たりに手錠がされていた。

「え？」

サタンが不思議がっているとスピードが慌てるが遅くサタンを捕まえた手錠に引つ張られていた。

「いったい何なんだあ!？」

「捕獲完了」

いつの間にか追いついたアラウディは、手錠によって戻って来たサワンを抱き締めた。

「うん、可愛い」

「……」

既にアラウデイの恐怖を知ってしまったサタンは、安全地帯の雨月のところに行きたいと心底思った。

「覚悟はいいかい果汁… 幼児誘拐の罪で逮捕する！」

「はあ！やれるもんならやってみなさい！アヒルが」

二人は、それぞれ武器を持つと戦い初めた。

アラウデイがサタンを抱いたままだが…。

「ばかやろう！俺様を降ろしてから殺し合いをしろ！！」

サタンの悲鳴染み打ったえも武器のぶつかるどうしの音で消えてしまった。

「ふむ、今日もいい天気だな」

「……」

もはやジョット意外の守護者たちは、壊されてゆくもう一つの別荘の解体に哀愁すら漂わしていた。

「父上… 貴方の勇姿は忘れません」

父であるサタンを殺そうと思っていたメフィストさえあまりにも酷

い仕打ちに同情した。

「…そろそろ聖十字騎士団に戻らなければいけなかったですね」
「やっと悪魔から解放される。メフィは悪魔です。しかしジョットと出会った事がメフィストの人生最悪の不運の始まりだった。」

おまけ

「そういえば別荘の修理代って誰がなお」

「あの馬鹿たちしかいないだろ？さて、掟を守らなかった二人をどうしてくれよう…」

クククと悪だくみを考えるサタンの様な顔で楽しそうに笑うジョットにメフィストは、これから二人に起こる災難の無事を祈らずにはいられなかった。

それから1ヶ月は二人の姿を見なかったと言う……。

計画（前書き）

突然ですが、前書きは、これで最後にしようと思っ
てます。理由はただ面倒くさくなったからと言っ
しょうもない理由です。うざくと無駄に長い
前書きを少しでも呼んでくれた方々に感謝
します。

計画

突如現れたデイーンとサムは、無駄のない動きで手に持っていたナイフをそれぞれ天使に憑依した男女に突き刺し倒していった。

「君たちはいつたい…」

あまりにも突然過ぎで頭の処理が追いつかなかった雪男だったが、シエラにつつかれ仕方なく口を開いた。

「いや、だから正義のヒーローデイ…」

「馬鹿言っていないで早くカスティエルを探すぞ」

「心配には及ばない」

「うお！お前いつからいたんだ？」

またもや現れた白のレインコートを着た男に隣たちは、警戒するが、デイーンとサムだけは違った。

「はあく、私から離れるなど言ったのに離れあげく座標を間違え異世界に飛んでしまっし」

男の“異世界”と言う言葉に最初に反応した綱吉は、カスティエルと名乗る男に質問した。

「異世界って、貴方たちもですか？」

「いや、私の場合と君の場合は、違う。私の場合は、私自身の力で過去に行くはずだったんだが……」

「……」

「何だよ、そんな目で俺を見るなよ！」

「あの、俺の場合は？」

「……この世界の上位天使の仕業だろ」

「理由は！」

「そこまでは、知らない。二人ともいくぞ、私にしっかりと捕まえ」
カステイエルという言葉に二人は、彼の手を握ったが、ディーンだけ綱吉たちの元に引き返し例の短剣を渡した。

「これ、やるよ。欲しかったんだろ？」

ディーンは、隣に短剣を渡すのを本人は、不思議そうな表示で短剣を見ていた。

「どうして俺に？」

「何だ……勘だ勘！」

「おい、ディーン！まだそんな子供に何あげてるんだ！」

「まあ、そんなにかりかりするなよ。サミー」

「…その呼び名は、辞めろと言っただろ？」

「早くしろ！帰れなくなるぞ！！」

「分かったって！その短剣は、悪魔だけでなく天使をも殺すことができる“大天使の剣”だ」

「デーン！！」

サム呼びかけにデーンは、慌ててカスティエルにしがみつくとサムと一緒に消えてしまった。

「何だったんだ、あれ？」

シエラの疑問に答えてくれる人はただ一人を除いていなかった。

さっきのことがあり皆が、別の部屋で話し合っていることをチャンスとみなし自分に抱きついていいるメフィストを殴る燐に近づいた。

「あのね、燐くん、少くし私と一緒に来てくれる？勿論一人で」

「奥村君、行かなくてもいいですよ？」

「いい いいー（奥村燐！この女を退かして下さい！臭いです！！）

「(りん!りん!この女くさいぞ!!)」

「良いぜ」

「!?!? (x3)」

燐の言葉に三人は、止めるもマリアの話は、続いていた。

「本当!じゃ隣の教室で待ってね」

マリアは、それだけ言うと出て行ってしまった。

「燐、何故罷だと分かってても行くんですか」

「ふん、そんなあの雌豚の皮を剥ぐために決まっているだろ?」

燐の「じゃなきゃあんな豚に近づかないぜえ」と吐き捨てる言葉に猫姿のアマイモンは、匂いのダメージでダウン寸前ながらも口を開いた。

「にいー…(いつそ殺せば簡単なのに)」

可愛い猫の声でとんでもない台詞を言うアマイモンに燐の眉間に皺が寄った。

「はあ、確かに殺すのは簡単だが処理が面倒しな……いつそ物質界を破壊しようか…」

燐の物騒な台詞にその場にいた者たちは、背筋をに冷や汗を流しながら証拠を掴もう作成に賛成した。

燐が、本気になれば本当に物質界を壊しかねないからだ。それほどの実力者なのだ。

「そう言えばツナは？」

「綱吉君なら皆のところに行きますよ？」

「ふーん、ま、いつか。ちょくらいじめられに行ってくるな！アマイモンは来てくれ」

「にー？（何故です？）」

「（りん、オレもいく！）」

「クロは、メフィストと待ってくれ。あの豚は、自分で傷つけ悲鳴あげるとおもうし、ちなみにしえみに出雲、メフィとクロとツナたちとアマイモンは見方で敵方は雪男！」

「良く、奥村先生が納得しましたね。猛反対でしたでしょ？」

「ああ、反対したな。だけど俺の退屈を紛らわしてくれる計画の邪魔したら身体中ホクロまみれにしてやると言ったら泣きながら黙ったぞ？」

「……………」

メフィストは、雪男にあまりにも恐ろしい燐の罰に無言になってしまったが、燐は今から遠足に行くき満々の足取りで行って行った。

さあ、俺の退屈を紛らわすゲームを初めようか！

精々マリオネット（操り人間）の様に踊ってくれよ？アーサ・オマ
リアさん？

作戦決行

マリアに呼びだされた燐の嬉しそうに付いていく様は、はた目から見て告白に心踊る少年に見えるが心中では「どんないじめが待っているのかな」と言う恐ろしい事を考えていた。

「ねえ奥村君と雪男君って兄弟なの？」

「良く似てな言っって言われるけど正真正銘の兄弟だぜ」

「ふうーん」

燐の言葉にマリアは、気のない返事をするも何か思いついた顔で猫なで（耳障りな）声で燐にねだった。

「あのね、マリア。雪男君が欲しいの。だから奥村君が雪男君をくれるんならマリアの恋人にしてあげるんだけどなあ」

マリアのまるで人を物の様に言う言葉に我慢がならないといったふうに怒鳴った。

「ふざけるんじゃないやねえ！誰が大切な弟をテメエ何かにくれるか！このブーのブーブーが！」

燐の放送禁止コードに引つ掛かかる台詞に普段言われ慣れてない台詞にマリアは、啞然としていたが、段々熱が上がりキツと燐を睨み付けた。

「あんた良くも私にそんな態度とれたものね！」

マリアは、怒りに燃えていた醜い顔を直ぐに笑顔になり燐を見下ろした。

雌ぶ…マリアは、懐からナイフを出しかちかちと半分まで刃を出し自分の服を引き裂いてから自らの腕に切り付けた。

「ぎゃああああああ ……！！！」

燐は、耳障りな悲鳴に顔をしかめたが廊下からバタバタと近づく足音に知らず知らずに口角をあげた。

「奥村君！何が合ったのですか？あの悲鳴は……」

「マリアさんどなした！」

「燐、こ、これは……！」

「あんたいつたい……」

「兄さん」

マリアは、自分で切り付けた腕の痛みで涙を流しながら一番に同様している（別にマリアの傷に同様している分けではない）雪男に抱きつき顔が、思いつきり歪んだ表情になっていた。

「ぐす…り、燐君が、ひつく…ま、マリアが告白したら…ひつく、急に襲って来たの…怖かったよ雪男君！」

燐は、「誰が雌豚を襲うか！」と叫びたかったが、塾生の疑いを無駄かも知れないが解くことにした。

「信じてくれ！俺は、何も悪くねえ！あの女が悪いんだ！！」

「明らかにお前が悪いやろ！」

「奥村君、わいは少しお前を信じていたんだ？それをお前は！！」

「ああマリアさん！酷い傷や…やっぱり奥村君はサタンの息子や！！」

「兄さん…やっぱりあの時に殺しておくべきだったよ（兄さんご迷惑。後ですき焼き食べさせるから！！）」

「み…皆…信じてくれ！しえみと出雲は、信じてくれるよな？（気にするな雪男。ただし後ですき焼き奢れ）」

「ええ！？えっと、その…私…（どうしよう。こんなの聞いて聞いてよ（涙））」

「知らないはよそんなの！自分で考えなさいよ（待つくあんたは、世話がやけるはね！！）」

「待つて出雲ちゃん！！（ありがとう！！）」

出雲がしえみを連れ消えてしまった。

燐は、皆を見回したが、その目は恐れと恐怖、裏切りと怒りに満ちていた。

「坊。奥村君に構ってないではよおマリアさんの手当てが先や」

「そうやった、奥村先生！」

「……」

「先生？」

勝麿の声に雪男は、一瞬飛んでいた意識が戻り体調が悪いと腕に抱えたマリアを志摩に渡し（押し付け）ふらつきながら寮に帰って言った。

「若先生どなしたる？」

「もお〜ん！雪男君ってばマリアの可愛いさにメロメロになったのよ」

（「嫌。100%マリア（雌豚）（汚物）さんのせいだよ」

京都組意外の皆の心境をさっした燐は小さく笑ったが、勝麿たちは何か言くとマリアを連れて去って行った。
顔をうつむき肩を振るわす燐に流石の魔王も堪えたらうと思ったツナと悪魔兄弟だが。

「く、くく…あはははははは ……！！！」

勢り燐が、顔あげたとたに笑いだし残った皆は、気でも触れたかと誰もが思った。

「ククク、あね雌豚の苦痛に歪む様は傑作だったよ！やっぱり鶏冠

組は、俺を信じなかったがまあいい。アマイモン！」

「はい、奥村燐」

燐の言葉に天井にぶら下がっていたアマイモンが答え下に降りた。その手に持っていたビデオカメラを燐に渡し。

「アマイモンさん、良く気づかれませんでしたね？」

綱吉の言葉に表情が乏しいアマイモンは淡々と答えた。

「僕は地の王です。これくらいできて当然ですよ」

アマイモンの上から目線に獄寺が切れる前に黒い物体が一直線にアマイモンに向かっていった。

「がきいん！」

「……誰ですか？」

「君、僕たちの綱吉を馬鹿にしたね？ 噛み殺す」

「ひ、雲雀さん!？」

「てめえ！俺より先に行くな！」

しかしアマイモンは、周りの声など無視し小さな子供に似合わない殺気に彼の中の悪魔が歓喜に震えていた。

「君、強いですか？」

「強いよ」

雲雀の言葉にアマイモンが
両手がふさがっている雲雀にトンファーを抑えてない手を細い首に
当てた時。

「行けアホ牛！」

「ぐびゃあー！」

「何やってるの獄寺君う！？」

何と獄寺はランボを雲雀たちの方に投げる様を見た綱吉は目を向い
た。

ぐさあ。

「……………牛？」

「何なのこのホルスタイン」

「ひい、ひつく…が…ま…んわあ ……！！！」

雲雀に迫っていた凶器はランボのアフロで止まりただでさえ怖い思
いをしたランボに追い討ちをかけるように二人の無言の圧力が加わ
った。

二人の圧力に耐えられなかったランボは、アフロからだしたあのバズ
ーカに綱吉はぎょっとした。

「ま、待てランボ！そのバズーカは！！」

綱吉の止めの声もむなしくバズーカはランボ…ではなくアマイモンに当たった。

「アマイモン！」

もくもくと煙が立ち込め気を失ったランボを雲雀は足で退かし現れるであろう未来のアマイモンに備え臨時体制に入った。

煙が晴れアマイモンがいたところに変わりに現れた生き物に皆頭上に？を浮かべさせしばらく沈黙した。

「……ハムスター？」

「うわぁ、可愛い！」

ちよこんと深緑の小さな体に頭天边が尖っている変わったハムスターに最初に声をあげた燐はそつと掌に乗せた。

「お前可愛いな、アマイモンだろ？」

燐の言葉に全員驚くがアマイモンらしいハムスターは、小さな頭を縦にふった。

「燐、何故そのハムスターがアマイモンだと？」

「見ればわかるだろ？」

「……………」

いくら色違いのハムスターだろうと“あの”アマイモンが、人間の器を捨てて小動物に憑依するなどあり得ないからだ。

「……………」

雲雀は無言で燐の掌でリラックスするハムスターをじいと眺めていた。

それに気づいたメフィストは冷や汗を流した。

「……………（デシャブウ!?）」

姿がアラウデイに似ているためメフィストが“あの事件”の二の舞ではないかと警戒するもハムスターから煙が立ち込めた。

「痛てえ！」

燐の倒れる音がしたが、煙が晴れその体制にメフィストが額に青筋を浮かべた。

「痛たた…てかてめえアマイモン重い！俺から降りろ！」

「燐、燐、僕の事は“アマちゃん”と呼んで下らない」

「アマイモン！早く燐から離れる…！」

「ヤダ。僕、今日から燐のペットになります」

「あ、こら待ちなさい！燐を置いてから消えなさい…！」

「うわぁい。兄上と鬼ごっこだ」

「鬼ごっこ！面白そうだな。鬼さ…じゃなくて悪魔さんこちら」

「待ちなさい二人共！！」

アマイモンは、燐を抱えたまま窓から出てメフィストもその後を追った。

しばらく辺りに沈黙が満ち誰かが言った。

「……家に帰りたい」

少年の願いは周りに響かなかつた。

作戦決行 2

荒れ果てた草原に一人の男が、立っていた。

その後ろでは男の配下の者たちが、主の命令を待っていた。

やがて男が、ゆっくり目を開き葵色の瞳にはこれから起こる戦争での歓喜に満ちていた。

そんな男の隣に高齢とは思わせない馬さばきでやってくる神父に男はニヤリと薄い唇を吊り上げた。

「おいおい、良いのか？神に仕えし悪を払う被魔師が、悪魔の見方をしてもよお？」

「馬鹿いえ、誰がお前ら悪魔に付くか。俺は、息子を殺そうとする天使が気にいらなただけだあい！」

「ああ？てめえの息子？ちげえよ。燐は、俺様の炎を承けずいてるからクソ神父の息子じゃなく俺様の息子だぜえ？もう一人の眼鏡は、いらなからてめえにやるは」

「てめえ雪男をいらないとか言っただな！そんな奴に俺の息子たちをあげねえよ！！」

「うぜえな。だったら息子じゃなく嫁として燐を貰う、眼鏡はてめえにやる。名案じゃねえか」

「燐は男だ！俺の目が黒いうちは許さねえ！」

「ああ？人の恋路を邪魔しやがるのか？だったらてめえを殺して燐を貰う」

「け、おもしれえ！やれるもんならやってみるよ？」

二人から吹き出す殺気に後ろに控えていた悪魔たちは、さらに後ろに後退り獅郎はライフル、サタンは、青の炎を出しお互いにらみ合っていたが。

「こらあ！クソサタンに生臭神父！！」

「ユリ様、少し落ち着かれては？」

「黙りなさいマーモン！！」

二人に猛スピードで白馬に乗った聖女とみがまうばかりの美貌を怒りで崩したユリ・エギンと後ろに座っていた黒髪の可愛らしい少女。“強欲のマーモン”を乗せていた。

「げえ！ユリ！？」

「ユリだって！？おいサタン！お前ユリを足止めしたんじゃないのかあ！！」

「したさ。……ベッドで」

「おまあ！なんてうらや…じゃねえ。命知らずだ！？」

「そりゃホクロ2号がいなかったらユリは、俺様の女だったしな」

「死ねサタン！」

ユリはサタンはマーモンの幻術で出した青の炎をおもいきり投げ

つけた。

「ま、待てユリ！サタンにそんな技は効かねえぞ！」

「……………」

ひよい。

マーモンの幻術をサタンは避けたが、その次のユリの拳がサタンの頬にめり込んだ。

「……………」

それを目の辺りにした獅郎だけでなく悪魔たちも元人間の女に殴られるサタンを信じられないと言った表情で見っていた。

「つうてえ……………てめえユリ！何しやがる。俺様の顔が変形したらどうしてくれるんだあ！」

「別にあんたの顔なんてマーモンの力でどうでもできるから気にしてないはよ」

「なにい！！ま、まさか今の俺様の顔は……………」

「（にこり）私に幾度のストーカーをした現クソ聖騎士様の顔よ」

「ま、待て！仮にも聖女と呼ばれていた奴の台詞じゃぬえぞ！！」

「関係ありません」

「すげえなユリ。俺ですらサタンの野郎に傷一つつけるのがやっとだったのに」

獅郎は、外見を止めないくらいにボコボコにされているサタンに同情するが、その前にさらに自分たち以上に同様している悪魔たちを治めるべく向かった。

ところで物質界で奥村燐は、現在下駄箱で悩…にやついていた。

「ひでえ…誰がこんな事をしたんだ！」

一見嘆いている様に見えるが、実際はにやついていておりその手には使い捨てカメラを持っていた。

パシヤパシヤ。

「あ、あの燐？」

「ん？」

「どうして写真なんて撮るの？？」

網吉の疑問は最もである。

燐の下駄箱には、これでもかと大量のゴミが詰められおまけに小動物の死骸まで入れられていたのだから。

「だってやったて証拠が必要だぜ？それに下駄箱にゴミって定番過

ぎてつまんねえ。やっぱり雌豚は雌豚だな！」

「……………」

例え理由が、分かっているとしても綱吉なら絶対に燐の様な前向きにはい
かなかつたろう。

教室。

教室に入り直つ先に目が入ったのはに“死ね”“悪魔”等が燐の机
に書かれていた。

周りの生徒たちも笑いながら燐を見ていた。

悪意の視線に震える綱吉だが。

「ああ…何って俺は不幸なんだ！」

パシャパシャ。

自分の机を撮る燐に綱吉は、さっきから気になることを言った。

「燐。取った写真どうするの？」

「パソコン掲示板に【今時のいじめ！全てのいじめの犯人はこの女
だ！】で、書いて雌豚のプロフィールとか掲示して…」

ウキウキと今後の復讐計画を楽しそうに語る燐に綱吉は、自業自得
だと思うが、マリアの無防備な行動で彼女の行く末を予想できた綱
吉は憐れみをマリアに送った。

放課後。

燐は、メフィスに呼ばれ朝早くから作ったカボチャのムースを持って理事長室に綱吉と一緒に向かうはずだったが、また雌豚に止められ学園の裏側に一人で来た。勿論「俺も行く」と言う綱吉を黙らせクロに見張りを頼んだ。

「ふふふ、良く来たはね。逃げたかと思っただは？」

「俺に何の用だ」

「ちょっと邪魔だから痛い思いしたら黙るかな　て、思っただね？」

マリアが、言うど草影から五人の体格の良い男たちがバットやパイプ。瓶に入っている水等を持ち、困んだ。

「やっちやて！」

マリアの一言に燐はいつせいに遅いかかる男たちを無言で見つめていた。

「ふん、今日は、これくらいで許してあげるは」

ポロポロの燐を一瞥しふと、草むらに置いてある箱に首を傾げた。

「何これ？」

「それに…触るな……!!」

「ふーん、美味しそうなケーキね」

マリアは、箱の中身のケーキだと分かると箱をわざと落として靴で踏みつけた。

「なあ!!!？」

「はい、こーんな安物のま、ずそうなケーキを見た目良くしてあげたから犬の様に這いつくばって食べたら？」

おほほほと高らかに笑うマリアにつられ取り巻きたちも笑いながら消えてしまった。

しばらくして燐が、心配でメフィスとクロと一緒に向かいそこでポロポロの燐に綱吉は、悲鳴をあげた。

「り、燐!!大丈夫!!!？」

「燐!しっかりしてください!!」

「(りん!ひどいけがだぞ!)」

三人は、急いで燐に駆け寄るが、うつむいて何かぶつぶつ言っている燐に気がついたメフィスは、はつきり聞き取るうとしたが。
「あゝのぐされ雌豚がああ！！良くも俺の自信作のケーキを潰しやがったなああ！！！」

「ひい！！燐の体から青い炎が出てるんだけど！！？」

「お、落ち着いてください！ここで暴れたらバチカンからのスパイに見られますよ！？」

「（うわあーりん、なんだそのあおいほのうは、きれいだぞ！）」

何時もの不敵な嘲笑いな表情ではなくまるつきしサタンの様な血走った目でマリアたちが消えた場所をい殺さん形相で睨み付けていた。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す……！！！」

「ひいひい！！怖い！燐だけど燐じゃない！？？」

「第2のサタンの誕生ですね……」

「（りん…なんかこわいぞ）がたがた」

怯える三人を放置し燐は、ズボンのポケットから鍵を取りだし鍵穴さえない地面に突き立てた。

驚く三人を無視し燐は呪文を唱えた。

「偽りを隠すは真実。真実を隠すは己の心！」

燐が、呪文を唱えると一瞬で扉が現れ啞然としている三人を置いて

さっさと扉の向こうに消える燐を慌てて追いかけた。
そこで目にした景色に三人は、さらに驚くことになる。

「凄い」

「私の学園でいつからこの様な施設を作ったのでしょうか…」

「（りんりん！これはなんだ？）」

驚く三人に目を向けなくて椅子に座りモニターを見ながら“ばくだん焼き”を食べてる青年の方に向かった。

「様子はどうだアマイモン？」

「（むぐむぐ…ごくん。）はい、ゴミ女は、被魔塾で燐の友達にちやほやされてます。それより燐その怪我は………」

「ただのかすり傷だ。そんな事より監視を怠るな！あの雌豚の正体を掴むまでな」

「…分かりますた。それと僕のご飯は？」

「メフィスが、何とかするから気にするな」

「ちょっと燐!？」

「うわあい、兄上の太ってる」

「それを言うなら太っ腹だ！」

「燐、この施設はいつたい！」

「あの雌豚が来る1日前にバチカンの爺どもをおど…話し会って作ってもらった」

「今脅したって言ったよね!？」

綱吉の突っ込みは、燐によりスルーされて落ち込むが、燐は、それは無視し別の扉に向かった。

「…何これ」

辺り一面岩の壁に覆われその真ん中に蓋が、されてない棺に一糸纏わないアーサー・Oエンジェルが、青い水に包まれてる状態で眠っていた。

「燐…これはいつたい!」

「遅かったぞ、燐」

「わりいな八雲」

突如赤い炎に包まれながら現れた天狐の八雲が腕を組み無表情な顔で現れた。

「全く、燐だけ来いと言ったのに…その傷からして無抵抗だったのだな？」

「だからわりいって!それより人形はできたか？」

「今日の前に寝てるだろ？」

八雲の言葉に燐は、にこりと笑い棺の中で眠っている人形にそつと手を乗せた。

固唾を飲んで見守る彼らだが、あんなにボロボロだった燐の体はみるみる良くなり変わりに人形の体に燐が、さっきまでの傷がなくなっていた。

「そついえば燐。何故今の今まで傷を直さなかったのですか？」

「俺の怪我をこの人形に移すためにわざと八雲の力で治療を封じたんだ。おかげで痛かったがな」

燐の次に八雲が人形について説明をした。

「この人形は、僕の神通力で作ったものに呪詛をかけたんだ。燐が、怪我をおった時の身代わりとしてな」

「それでは、つまり……」

「ああ、この水は、京都にある貴船神社の神から譲り受けた水だ。例えばどんな怪我をしても痛みを感じないが、その変わり水からであれば今まで抑えた怪我の痛みが来るがな」

八雲も燐も平然と言ってのけた言葉に綱吉は、身震いした。

「じゃ、じゃもしも燐が、致命傷の怪我をした時人形に移すと……」

「確実に死ぬな」

何でもない燐の言葉に今まで黙っていた綱吉は、切れた。

「何でそんなに平然としてられるの！人が、死んじゃうかもしれないんだよ！！」

「…あの雌豚は、俺を嵌めるだけじゃなく明らかに度を越えているいじめをされたんだぞ？」

「で、でも！」

なおもい募る綱吉に燐は、ため息をつくと一瞬で綱吉の前に現れ鞘に入れたまんたの俱利伽羅を突きつけた。

「例え分かかっていても俺の友達だった奴等にいじめられたんだぞ？それをてめえは、何でも無いように言うがな！俺だって悲しいんだ！！」

燐の悲痛な叫びに綱吉は、涙を流しながら俯き小さく「御免」と誤る姿に燐は、二度目のため息をついた。

「別に気にしてねえよ。悪かったな」

「ううん…俺が、悪いんだから燐は、誤らないで」

二人は、お互いに笑い合った事で殺伐とした空気が、消えるのを感じたメフィスたちは安堵し、二人を暖かい目で見ていた。

「（りん、りん！おなかすいたぞ）」

「お、わりいなクロ、メフィスと綱吉、戻るぞ。じゃ八雲、アマイモンにお前の分も合わせて後からメフィスが飯持って来るからと伝えてくれ」

「ちよっ燐!？」

「御意」八雲に伝言を頼むと燐は、二人と一匹を連れ施設から出ていく後ろ姿を八雲は、何時までも見つめていた。

終わりの幕をあげるは…

あれから一週間。燐は、いじめられていた…いや、正確には、いじめを楽しんでいた。

「ふあゝ、大分雌豚の情報が、取れたし身代わり人形には輝が入ってるし…そろそろかな」

「燐、そろそろって？」

「いじめ飽きた。ワンパターンだからつまらないぜ、もっとこつ…水攻めとか火やぶりとか…」

「……そこまで考えられるのは、燐だけだよ」

憔悴しきった綱吉にも構わず燐は、今までの人生の中で楽しいと言った表情で紅茶を飲んでいた。

「ところで綱吉君。膝に乗っている使い魔は、何ですか？」

「何六道2号。綱吉と骸の邪魔しないでよ」

「どう言う意味ですか？恭弥君」

「……てか骸と恭弥さん。いつから俺の膝にいるんですか??？」

「「一億と二千年前から」」

「おお、それは、ロボットを操る変態タイトスの男女が出るアニメか

「！」

「その言い方は、いくら憐と言えと許しませんよ！アクエリはオタクたちの聖なるテレビですよー！」

「……………」

「何ですか？」

「お前って本当に顔は、いいのに残念だよな。特に頭の中が」

「失礼な！貴方には、オタクの凄さが、分からないのですか。だったらじっさいに着て感じてくださいー！」

「寄るな変態オタク悪魔ハゲ死ね」

二人のじゃれあい？をほのぼのと見ていた綱吉だが、かちやかちやと金属が、ぶつかり合う音に下を見て目をむいた。

「何やってるんですか！二人共！！？」

「まだ正式な契約結んでないからせつかくだし君の体液を代価にしようと思っただけ」

「ちょっとまじ止めて！助けて獄寺くん山本！！」

「…僕たちの前で男のことを考えるなんていい度胸じゃないですが、まあ残りのお馬鹿さんたちには、ある任務をしてもらっているので呼んでも来ませんよ」

「皆の薄情もの!!」

あわや公開………になるところだったが、メフィスを沈めた燐の鉄拳で未遂に終わった。

「それで燐。段取りは？」

「段取り?んなもんねえよ。まあ俺に着いて来い」

燐が、そう言うのと血走った馬鹿を二人を抱えた綱吉とメフィスは、燐に続いて体育館に向かった。

・

燐たちが、鍵の力で体育館に着いた頃には、ほとんどの生徒や教師たちが集まっていてその真ん中に豪華な装飾品が、ほどこされている椅子に座っているマリアに燐は、おもいつき顔をしかめた。

「相変わらず豚だけにあの場所くせえな。良く皆平然としてるな」

「いいえ燐。全員では、ありませんよ」

「ん？」

「しえみさんと出雲さんと雪男さんは、隠そうともせず思いつきり顔歪めてますし」

「ぶぶぶ… 皆さん燐と綱吉くん。奥村先生何か意識不明ですよ！」
メフィスとの言葉に燐は、雪男にべったりとくっついていている雌豚に
を見て雪男に憐れみの視線をで見た。

「…早くしねえと雪男が、ストレスで死んじゃうな」

燐が、何か呟き二人は、何だと見たが、燐の姿は、なく既にステ
ジに出ている姿に二人は、「いつの間に！」と驚いた。

「ながくお待たせしてすみませんでした！これから始まるは、偽り
に惑わされた馬鹿たちに信じつつを伝える… 真実の使者です」

体育館に集まったマリアと雪男たちは、それぞれ談笑をして時間を
潰していた。

「勝磨くんコーラ」

「はい」

「子猫丸くん肩もみ」

「は、はい！」

「志摩くん足揉んで」

「は、は、はい！」

……パシリ。京都組は、マリアに思いっきり良くてパシリ、悪くて奴隷の様に扱われていり姿にしえみは、複雑そうな表情で三人を見ていた。

「ねえ出雲ちゃん」

「なに？」

「良いのかな、あれで？」

「ふん、本人たちが、幸せそうな顔をしているからいいんじゃない？ほつとなさい」

「でも……」

「それより奥村先生を助けなくていいのかしら？」

出雲の言うとおり雪男にべったりとくっついてるマリアに雪男の表情は、死相ですら見せ目が死んでいた。憐れな雪男の姿に二人は、目を反らした。

「ねえあれ奥村じゃない？何でステージの上にいる分け？？」

「あ、本当だ」

ステージの上上がった燐は、言った。

「ながくお待たせしてすみませんでした！これから始まるは、偽り

に惑わされた馬鹿たちに信じつつを伝える…真実の使者です」

「あれ誰？」

「不良の奥村兄じゃないか？」

ざわつく体育館に燐は、「静粛に！」と言つ言葉に辺りが、静かになったことを確認するて続きを話した。

「最近転校して来た女子生徒は、皆さんは、知ってますね？」

「転校生？」

「マリアさんのことじゃない？」

またざわつき初めた体育館に燐が、机を手で叩き割つたためまた静かになった。

「皆に発表するぜえ！アーサ・O・マリアは、いかさまをして皆さんを騙してました！」

さつきよりもざわつく回りに「ちょっと待って！」と言つマリアの声にぴたつと、静かになった。

「何馬鹿なこといつてるの？マリアが、皆を騙した証拠が、ないじゃないの。証拠もないのにマリアを犯人呼ばわりなんて悲しい〜」

燐にしてみれば嘘泣きだが、頭まで殺られ皆は、本当の涙だと信じて疑わなかった。

「そつだぞマリアちゃんに謝れよ！」

「そつよそつよー!!」

周りのブーイングに燐は、ため息をつくと床に拳を叩きつけた。

ばきい！

燐が、拳で叩きつけた床が、抉れステージの五メートル位の大穴を開け皆が、唾然としている中ニツコリと清らかさが、漂うまるで聖女の笑みで…。

「これ以上五月蠅くしたらげへ…：：：生き地獄を見せちゃうぞ」

しかしその顔に似合わない言葉と全く笑ってない目を目のあたりにした皆は、興奮で赤かった顔から青白い顔に変わった。

「は、はい（ガタガタガタ）×全員」

「さて、静かになったところでせつかくなのでスクリーンを見せます。かもんアマイモン！」

燐の言葉と共に照明が、消えいつの間にか居たアマイモンは、後ろで手動のスクリーンに移しだされた画像に皆は目を剥いた。

【スクリーン映像】

「あのねパパ。マリア聖十字学園が、欲しいな」

「聖十字学園？あれは、駄目だ」

「何で！パパは、マリアのことが、嫌いになったの（涙）」

「いやあ、違うんだ、あそこには、サタンの落胤もいるんだぞ？そんな危ないところに娘をやるのは……」

「（くす）だーい丈夫 全てマリアに任せてパパは、私が、罪に与らない様にきちんとやってね？」

「ああ、任せろ。可愛い娘のためだ」

「やった！パパ大好き」

「ははは、可愛い娘のためだ」

「後ね惑わしのピアスも頂戴？別になくても良いけど私の目標は、かっこいい子は恋人で不細工な子は奴隷にすることなの」

ぶちい……。

スクリーンに移しだされた映像に放心していたマリアだが、皆の蔑み軽蔑した視線にマリアは、もはや言っても信じてくれないと分かると怒りに燃えた顔で壇上でニヤニヤとニヤケる燐を睨んだ。

「許さないから！パパにいつつけて殺してやるは！！！」

マリアは、そう言うとスカートのポケットから携帯を取りだしバァチカン本部の父親に連絡した。

「パパ！奥村燐を殺しちゃ……」

「ピー、おかけになった電話は、現在使われていません……」

「う、うそ…パパ、パパ！！」

マリアの必死な打ったも繋がらずそのまま切れてしまった。

唯一の頼みの綱を無くしたマリアは、顔を青ざめガタガタと震える様を燐は、白い顔に冷笑を浮かべた。

運動なんて怖くない…

びい。

「もしもジジイか？」

「神父（父さん）（藤本）（しろつ） クロ。だって！？」

ステージのカーテンに隠れていた三人と一匹だったが、燐の携帯から出た意外な人物に雪男を覗いた三人と一匹は、思わず出てしまった。

「うんうん、そっちは、どうだあ？あんまりサタンの糞野郎と喧嘩するなよ、かあさんにもよろしくって言ってくれ、ありがとうな！」

「え、ちよつと兄さんかあさんって???!」

雪男の声もむなしく燐は、電話を切ってしまった。

「兄さんかあさんってどういう事なのさ！」

「かあさんとジジイは、虚無界にいるぜえ。本当にあいつら馬鹿だよな…天使と敵対してる悪魔を被ったんだから天国に行けるはずなのに……」

「……このくだらな物語が、終わったらかあさんと話させて」

「…ああ。この茶番劇が終わったらな」

二人の良い空気をマリアの悲鳴で壊され燐は、ムツとした顔になった。

「ひ、ひい、助けて！誰か助けて!!」

「五月蠅い豚だ…な」

燐が、ステージから飛び起り這ってでも逃げようとするマリアの頭上になんと着地した。

「ぐええ!?!」

「あ、わりい間違いた」

全く罪悪感を感じない軽い声で誤るが、マリアが、震えるだけでも喋らないのにイラツときた燐は、無理やり立たせた。化粧が落ちマリアの素顔に燐は、汚い物を見る様な目で見た。

「ひい…た、助け……」

「うわあ、気持ちわりい！」

燐は、いかにもな顔をしてマリアを思いっきり蹴り飛ばした。

ばきい…。

「ぎい、ぎゃああああ
……！！！！」

「あはははは！！本当に豚見たいな悲鳴をあげるんだた」

燐が、マリアを蹴り飛ばしたため片腕が、折れてしまったが、燐は、ただ楽しそうに笑うだけだった。

「あ、そうそう、本日付にヴァアチカン本部に変わり死刑な？」

燐の言葉にマリアだけでなく全員が、驚愕の目で燐を見るが、その目には、嘘は、なかった。

「て、天使！は、は、早く私を助けなさい！！！」

「あてめえについでた天使は、天界が、虚無界とツナの使い魔たちの手によってほぼ壊滅状態で降参したからもうついてねえぞ、なあ、豚野郎」

「ひいい！ゆ、許して！」

「だ、め」

「ばちい。」

燐が、指を鳴らすといきなりマリアの身体中から血が溢れ出し顔が崩れ肌が裂け、眼球が落ち……悲鳴をあげながら想像絶する痛みにのたうち回った。

「がはあ！はあ、ぐあ！？」

「燐くんひよとするとこれは」

メフィストの言葉を最後までいい終わる前に燐が、あっさりと答えを言った。

「そう、俺が合図をしたら人形を水からだせてな」

「……………っ」

ほとんどの生徒は、何が、起こったかは分からず呆然としていたが、この状況を知ってる綱吉だけは、小さくなった雲雀と骸を抱き締めるのに気づいた二人は、綱吉の紅茶色のふわふわとした髪を撫でた。

「…ひゅ…ひゅ…ひゅ…」

もはや虫の息なのに燐は、ぐちゃぐちゃになったマリアの背中を踏みつけ笑った。

「まあまあだったが、てめえの茶番劇は、楽しかったぜえ？お詫びに“地の王”が、最高の場所…地獄に連れてってやるよ」

燐は、アマイモンにマリアを投げ渡すと彼は、一度受け止め体制を変え足を持った。

「分かりました」

「それとお前の血だけじゃ開かないと思うから“こいつら”を持ってけ」

燐が、アマイモンにルビーが嵌め込まれていた指輪を受け取りマリアを引き摺りながら少し広い場所につくと自身の血と指輪の力で小さいながらも虚無門を作り躊躇いなく入った。

「ぎいー！」

しかし途中で少し意識が、戻ったマリアは、抵抗するも無駄に終わり直ぐに閉じた門に腕だけを残し消えてしまった。

しーんと静まりかえる体育館に燐は、地面に生えた腕を足で思いっきり踏みつけ地面にめり込ませるとそこら辺の土を被せステージに上がった。

「と、言う分けて俺や仲間の手をあげたら死刑な」

燐の恐ろしい言葉を最後に皆は、しばらく動かなかった。

「ああ、あ、何かあっさり過ぎてつまらないぜえ」

「それにしても燐。あの女は、どうしたんですか？」

「んあ、ジジイたちと話合って下級悪魔たちのたちの玩具にすることに決まったんだ、ちなみにこの案を提供したのは、俺たちの母親な」

「かあさんが?!?!」

驚く雪男に燐は、自分より後ろにいる綱たちにニイと歪んだ笑みで笑った。

「いつまでもつかない」

燐の言葉に答えられる人は、この場に居なかった。

おまけ

「(ドキドキ) ぴい、もしもしかあさん、雪男で……」

(あ、サタン…そこは！)

(ククク、そんぐれえで感じて淫乱が)

(ま、待って！あ、ああん！！)

(……ユリ)

ぴい……。

「どうした雪男？かあさんと話せたか？？」

「……………サタンぶつ殺す！！兄さん早く虚無門を出しやがれえ！！」

「うお！どうしたんだ雪男？」

・

「何やってるんだ…お前ら」

「何って」

「ナ…」「オイルマッサージよ」「」

【オマケ】魔王の退屈（前書き）

まだオマケのような続きとして書きます。

新連載も初めました、タイトルは【異世界の訪問者】です。

まだ少なくなりますが、見てください。

【オマケ】魔王の退屈

あの事件から1ヶ月がたち、全校生徒に正体が、ばれた燐は、ただいま理事長室のソファ―に座り不機嫌な顔で紅茶を飲んでいた。

「何ですか燐。そんなムスツとした顔して…紅茶が、不味くなりま
すよ」

「そつだよ燐。何かまた悩みでもあるの？」

二人の言葉に不機嫌なままんま燐は、理由を話した。

「暇だから」

「はあ？」

「だから！あの雌豚の事件が、合った日から全くと言って良いほどに平和なんだよ！？」

燐の悲痛な叫びに二人は、ため息をついた。

メフィストは、あの事件の後処理に終われ綱吉にいたっては、友達が、一人もできなくなっただからだ。

「そつだ！良いこと思いついた」

燐の弾んだ声に二人は、即座に逃げようとしたが、燐が、それを見逃す筈はなかった。

「ちなみに逃げたらためえら聖十字町を裸で一週な」

紅茶を飲みながらの燐の言葉に二人は、固まってしまった。

・

その日燐は、一時限目の授業にも関わらず一人で放送室に居た。

「ちてて…」

燐の今の表情は、魔王のそれだった。

ぴんぱんぱんぱーん

「（全国生徒につぐ、明日開かれる仮装コンテストに教師含め全員出る）」

ぢわぢわ。

「何だあいつえられつに」

「本当ね」

「（ちなみに明日のコンテストに出なかった奴や俺に面白くないと

評価された奴は、その日から学園生活が、遅れないと思ってくれ」

「何でお前が、指導してるんだ！？てか、負けた時の罰ゲーム酷くねえ！！？×全員」

燐のあまりにな罰に全員は、突っ込むが、勿論聞こえてない燐は、さくさくと話しを進めた。

「…て言う分けて優勝者には、何と1日理事長になれます では、以上！」

ぶちい。

放送を切ると皆は、授業も忘れ必死で両親に仮装の服を泣きながら頼む姿が、ちやほや見られた。

翌日。

天気は、晴れでいつの間にか、用意してあるステージと観客席があり、観客席には、何と子供バージョンのサタンと藤本、ユリとなぜか七つの大罪も座っていた。

「ええ、司会者は、この私！ヨハン・ファウストが努め審査員は、奥村燐くんて雪男くんです」

「兄さん」

「何だ雪男」

「僕は、出なくて良かったの？」

「何だ？出たかったのか？？」

「うん、兄さんに裸にされ首輪でゆかれると思つとぞくぞくするんだ」

「……………」

燐は、あの日以来得体の知れない何かを開いた弟を出さなくて良かったと思った。

嫌がる奴らを見るのは好きだが、喜び奴は、苦手だからだ。

「それでは、エントリーN0・一番！」

コンテストは、さくさくと進みある者は鳴いて喜びある者は絶望しながらも進んでいた。

「それでは最後のエントリーN0・さんです！」

雪男だけじゃなく審査員も選手たちも最後に現れた人物に目を向いた。

「私の名前は、世界の傍観者」

仮面とフードで顔が分からないが、変声期を迎えてない高い声が、辺りに響いた。

「そしてその正体は！」

仮面の男が、フードと仮面を取りその姿に会場にいた皆は、さらに驚愕しあ。

「り、燐？」

フードに隠され分からなかったが、長い青色の髪に少し吊り上げられた目に蒼瞳の瞳の少女がいた。

「その嵬はへー、かつこいい」

「へえ???？」

燐そっくりな少女の淡々としたギャグに一同は、突然の事で啞然としていたが。

「あはははは！お、俺と…お、同じ顔で……ぎゃはははははは！！」

バンバンと雪男の背中を叩く燐を恍惚とした顔で受ける雪男の姿に皆は、見ないふりをして消えた少女のことを考えていた。

結局優勝者は、謎の少女だが、もはやいないたため最下位の生徒に罰を受けるはずだったが、綱吉の止めにより命びろいした生徒は、綱吉を救世主として崇拜するようになったとかなかったとか…。

「それにしてもあの燐そっくりな少女は、何だったんだろ？」

綱吉の疑問は、騒がしい声によりかき消されてしまった。

「どうだったもう一人の俺？」

「おう、最高だったぜ。わりいな、“色々してくれたのに”また急に呼びだして」

燐の謝罪に【燐】は、緩く首をふる。

「気にするな。あいつらの間抜け面を見ただけで楽しかったぜえ」

「またな」

「おう」

【燐】は、燐に手をふりみを送るとステージに戻るためゆっくりと足を進めた。

燐の使い魔と大空と天象の帰還（前書き）

長らく放置してしまつて大変申し訳ありません！

やっとこの小説も終わります。

短い間ながらお付き合いさせてもらい心から感謝します！

今まで書いた小説の中で長いです。

それと名前だけです。が長々しい悪魔も出ます。

途中話しが分からないと言う方は御詫び申しあげます。

それでは長らくお待たせしましたが、どうぞ楽しんで来てくださ
い！

燐の使い魔と大空と天象の帰還

今だに帰れない沢田綱吉だが、彼には、どうしても気になることがあった。

最強にして最悪の親友、奥村燐についてだ。

前に聞いたが、燐は、上級悪魔を二体とソロバン72柱（ソロモン）てきいたが、まだ見てなかった。

一回ペンダントに手をかけたが、侵入者のせいで見られなかったため綱吉は、どうしても燐の手持ちの悪魔が、見たかった。

チャンスを伺っていたが、綱吉を悩ませる元凶から飛び込んでくれた。

「明日被魔塾主催劇をしようと思う！まずどんな劇をしたいか皆の意見を聞く」

燐のいきなりの提案に何が何だが塾生たちは、混乱していたが、しえみだけは、違った。

「はい！シンデレラがいいと、おもいます！！」

「ふむふむシンデレラ…と」

燐が、黒板に書くと勝暦が、おずおずと手をあげた。

「あゝその奥村？授業は……」

「ああ？裏切り者が、何言ってるんだ。てか、俺に指図する身分か？ああ??？」

凄む燐は正直言つて怖い。

そんな燐の表情というよりも言葉に傷ついた勝磨は、黙ってしまいそんな彼を一瞥しサクサクと題と配役を決めてしまった。

「よし！題は【灰被り】で配役はこうだな」

灰被り 奥村燐

意地悪の三姉妹 京都組

継母 神木出雲

灰被りの友達 沢田綱吉 社山しえみ 宝 霧隠シエラ

魔法使い メフィスト

舞踏会の貴族 燐の使い魔 アマイモン等

木 奥村雪男

王子様 アーサ・オーギエスト・エンジェル

「以上だが、何か質問は？」

静かな教師に燐はが、決まりだなと言う前にシエラが意見を行った。

「おい待て燐。何で雪男は木何だ？他に役はなかったのか？」

それは誰もが疑問に思った言葉だった。

しかし魔王奥村燐に意見する勇気がない彼らは、シエラ言葉に心

の拍手を送った。

「地味だから」

「え？」

燐の言葉にポカンと口をあける彼らにため息をつきながらめ詳しい事情を説明した。

「雪男は地味だ。だが、俺は例え雪男がただの木でも煌めくと信じている」

「……………」

燐の言葉に誰もが呆気に取られていたが、志摩は恐る恐る手を上げた。

「あの奥村くん？ 一ついいですか？」

「何だ“エロ魔神”」

「ちょっ！ 何で奥村くんが、わいの昔のあだ名を知っているんや！？」

「頭がピンクだから」

「頭関係ないやろ！ ほんま奥村くんコ ンかいな！！」

「犯人はエロ魔神だ！」

「もうそのあだ名止めて！わい恥ずかし過ぎて死ぬは！！」

足にすぎる志摩に隣は、靴を口に入れさせ黙らすと冷たい微笑を浮かべ志摩をみろしていた。

「嫌だったら俺の犬になれ。じゃなかったら死ぬ」

「んがぁ、ふがふががが！？（それが、友達に対する態度かいな！？）」

志摩の打ったに隣は、つまらなさそうにただ眺めていた。

「てめえは友達じゃねえ…他人だ。それ以上グダグダ言っと“本当の灰被りの様にするぜえ？”」

冷めきつた隣の言葉に志摩は固まると口から靴を出すと寮に戻るためにドアに手をかける前にしえみたちぬ冊子を投げてよこした。

「それ灰被りの台本だから各自覚える様に！」

パタン。

今度こそドアは閉まった。

それから一週間は地獄だったと誰もが語っていた。

劇は隣と雪男が暮らしていた教会でやることになり子供も見に来るという配慮も考え残酷のシーンをカットする隣で隣の舌打ちを聞いたが、誰もが知らない振りをして本場を迎えた。

教会の中はメフィストの力で別の演劇団の稽古場を借りることになったが、あまりにも豪華な装飾が施された劇内とは思えない空間に客だけでなく役者たちも唾然としていた。
何だかんだで劇が、始まった。

く幸せな灰被りく

むかしむかしある一軒家に灰を被ったまお…ごほ。シンデレラが、いました。

シンデレラの父親は早くに妻を無くし新しい妻と結婚をしました。しかしそんなシンデレラを待っていたのは継母や義姉たちの陰険ないじめでした。シンデレラはいつも薄汚れた服を着てシンデレラが継母や姉たちに毎日働かされかまどの側に座って、日がな薪を燃やしたり灰をかき出したりしていました。

「シンデレラ。お前いつもそんな灰まみれの場所で寝ていて汚いね」

「だって義母様がそこで寝ると…」

「あんた雑用係の癖して母様に何てことを！」

「まあ落ち着きなさいテレサ…シンデレラ、働き者のお前に今日から新しい名前をつけてあげますよ」

「名前？」

「灰だらけの尻キユサンドロン。貴方にぴったりな名前ね」

「流石お母様」

あはははは！

「……」

「……まだ掃除は終わってません」

「……ごめんなさいシンデレラ。私はお母様とお姉様に逆らえないから変わりに灰かぶり（サンドリヨン）と呼んでいいかしら？」

「え……でも」

「いいから！……貴方の名前言えない私からのプレゼントよ」

「ありがとう。ビビィ」

灰被りにビビィは笑い部屋に行く後ろ姿を見て直ぐに掃除に取りかかった。

（中略）

国中に王子の花嫁を選ぶたも町中の娘たちを集め舞踏会を城で開くとの知らせに町の娘たちは、色めきたちそれは灰被りの継母や姉た

ちも変わらなかった。

「テレサ、ビビィ、マーレット！支度は出来ましたか？」

継母の子供に三人の娘たちは答えた。

「はい。お母様」

「早く行きましょ？」

「……………」

三者それぞれの反応の内一人だけ無言の娘に継母は、声をかけた。

「マーレット。どうしました？」

「な、何でもないは！お母様」

「まあ良いでしょ、キュサンドロ。お前は引き続き床の掃除をするんだよ」

「はい…お母様」

「ダーテイー！」

「な、何だね？」

「キュサンドロを見ててください。もしもサボれば……………」

「わ、分かったよ」

びくびく怯える夫に継母はチラリと夫を見ると娘たちを連れて出て言ってしまった。

「大変だったね灰被り…お前は母さんの財産をどこにかくしてあるか知っているかい？」

「知りません」

「でもね、正直に言えば母さんだってもうお前をいじめないかも知れないんだよ？」

「だから知りません。お父様…仕事の邪魔ですので出て言ってください。」

「……分かったよ」

父親は幕の向こうに消えて灰被りにスポットライトが、照らした。

「お母様…私もう耐えられません！」

灰被りは母親が、死ぬ前にある遺言を残していた。

『何が合ってもお父さんに財産の場所を言っては行けません』

「……………」

「お嬢さんどうしましたか？」

「え？」

悲しみにくれる灰被りだが何処から声がして音の元を辿ると遺言通りに母の墓の上に植えた木が、何と喋っていました。

「貴方は？」

「僕は木だよ。お嬢さん何か困ってますね？良ければ力になりますよ」

「実は…今日お城で舞踏会が、開かれるんです」

「舞踏会に行きたいと？」

「でも、私のこんなみすぼらし格好じゃ…」

「だったら僕が君を舞踏会に行ける様にしてあげる」

「…え？」

「おおい。動物たち！力を貸してくれ！」

木の願いに森の動物たちが現れ…

「やあ奥村燐。呼んだかねえべふう！？！」

「糞ロン毛！てめえの出番は灰被りが、舞踏会に行った後だろ！？何でいるんだよ！！！」

「ははははは！可愛い恋人のピンチに駆けつけるのは王子の役目だろ？」

「どつでもいいけど志磨たちはどうした？」

「あの京都組のことか？勿論奥村燐をいじめた罰として外に放りだしたさ！」

「……しえみたちは？」

「丁寧に退場をお願いしたさ！」

「……」

「さあ奥村燐。邪魔者が消えた事だしこれから私と一緒に愛のサンバを……」

ぶちい！

「……も……な」

「うん？」

「何子供たちのために作った劇をぶち壊してるんだあ！この変態口ン毛がああ……！！！！」

「ぶぐらばー！？」

アーサーに劇をぶち壊しただけでなく子供たちに悪影響を与えないために燐は拳をアーサーの鳩尾に叩きつけ倒れたアーサーの頭に足を起き何が起こったか分からず困惑する会場内にいる全員に燐は、にこりと笑った。

「皆様には大変ご迷惑おかけしました！これより俺の友達によりパフォーマンスを初めます」

ざわざわざわざわ。

「一番手は“火の鳥”による炎を使つての芸です」

燐の言葉に赤のドレスに赤い髪。金色の瞳の美しい美女が、ゆっくりステージに上がりその美しさに誰もが見とれていた。

ぼぼお…。

火の鳥の手から出された火に動揺する一同に艶やかな笑みを浮かべると手に出された火を上投げた。

バチバチ。

「これって花火？」

「うわぁ！綺麗」

「ママママ見てウサギさんだよ！」

火の鳥は、最後に大きな火の花を作りゆっくりとお辞儀をし幕を下ろした。

幕が降りると同時に客からの盛大な拍手は会場を満たしていた。

「幸せの灰被り 終わり」

未だに気を失っているアーサーを幕の向こうまで引きずってから脇腹を蹴った。

「……っ！ここは…？」

「目が覚めたか変態」

「奥村燐！ここは…」

状況が、掴めないアーサーのために燐は冷めた声音で説明した。

「てめえが劇をぶち壊したせいで俺はいじめられぞんだ」

「何を言うか！そんなおんぼろの服を着てても光ってるよ（キラーン）」

「うざあ！やっぱお前すげえうざいは！てな、訳でさっさと火星に帰れ」

「あははは！帰るとしたら貴様も一緒だろ？ハニー」

「キモオ！うぜえだけでなくキモいから近寄るな！」

「さあ奥村燐。いざ私の胸に！！」

ごーん。

アーサーの頭を羽扇子で叩いた赤い美女に燐は、助かったと言わんばかりの笑顔だが、綱吉以外残っていた皆は羽扇子からあり得ない音に顔を引き面せた。

「怪我はありませんか？」

「サンキュー朱雀すねに月夜つげ。お前らが来てくれなかったらこいつを本来の場所…火星に返すところだったぞ」

「燐様に怪我が、無くて私も月夜も嬉しいです。ところで燐様、これはどうしますか？」

朱雀が、これと指さしたアーサーに燐は感心のない態度で二人に頼んだ。

「とりあえずオホーツク海に捨てといて」

「御意。行きましよう、月夜」

「……………（じくん）」

朱雀は、銀色の短い髪に赤い瞳の舞踏会の衣装を着たまんまの美青年と共にアーサーを引きずりなら去って行った。

「兄さんあの二人も使い魔？」

「まあな。朱雀はフェニックスで月夜はフェンリルだよ」

「どれも伝説上の者たちだけど悪魔じゃないよね？」

「はあ？てめえきちんと勉強してきたか？悪魔に詳しい人なら知ってるグリモアの書に書かれているソロモン72柱に数えられている。ひよっとしたら72以上かも知れないな。まあ朱雀はソロモン王ではなく俺の使い魔になったからな。」

「…何か兄さんに馬鹿にされて悔しいけどやっぱり凄いな」

「そんなことより雪男。綱吉たちは？」

「綱吉くんがどうしたの？」

「…事情は後で説明するから！」

「アーサーに追い出された後だから多分森の方に行ったんじゃないかな？」

「ありがとう雪男！」

何を慌てているから雪男は分からなかったが、燐は目にも止まらない速さで教会を出て行った。

「痛たたた…アーサーさんいきなり放り投げるから腰打っちゃたよ」
腰を擦りながら立ち会った燐は、見知らぬ森に一人突っ立っていた。

バサバサ。

「（びくう！）……ひい！…うう、早く燐たちに空きたいよ」
段々暗くなる森に泣きそうになちになつ綱吉だが、此方に向かってくる足音にそちらに視線を向けた。

「つゝなゝよゝしゝ！！」

「り、燐！？」

一直線に此方に向かってくる燐に綱吉は驚くも構わず燐は、綱吉の両肩をを掴んだ。

「今何時だ！」

「え？」

「早く!!」

燐の剣幕に驚きながらも綱吉は夜の11時55分だと伝えると燐は、険しい顔になった。

「今からお前の世界に繋ぐ扉を開くから速く行け。…くそお!劇の練習で気づかなかったぜ」

「ま、待って燐!どういう…」

「お前がここに来たのは天使たちが時空を歪めたからだ!その後も世界の傍観者に頼んで入り口を維持していたが、さつき天使たちの残党が、仕返しに入り口を閉じようと躍起になっている!」

「待って雲雀さんたちは!?!」

「大天使ミカエルが、責任持って元の世界に送った。後はお前だけだ!!」

燐は、矢継ぎ早に言うといつの間にかシャツに着替えた袖が出た手首を鋭く伸ばした爪で切り裂き地面を血で汚すと指に嵌めていた指を小さな血の海に落とすと素早く呪文を唱えた。

「我と誓約しせし偉大なるソロモン王の悪魔達よ!その名に呼ばれ異界の門を開きたまえ!アイム

、アガレス、

アスモデウス、アミー、アムドウスキアス、アモン、アロケル、ア
ンドラス

、アンドレアルフス、アンドロマリウス

、イポス、

ウアサゴ、ウアプラ

、ウアラク、ウアレフォル、ヴィネ、ウヴァル、ウエパル、エリゴ
ス、オセ、オリアス、オロバス、ガープ、カイク、ガミジン、キマ
リス、グシオン、グラシャラボラス、グレモリー、クロケル、ザ
ガン、サブナツク、サレオス、シトリー、シャツクス、ストラス、
セーレ、ゼパール

、ダンタリオン、デカラビア、ナベリウス、ハーゲンティ、バル、
パイモン、バティン、バラム、バルバトス、ハルファス、ビフロンス
、ブエル、フォカロル、フォラス、フォルネウス、ブネ、フラウロ
ス、フルカス

、プルソン、フルフル、ベリアル、ベリト、ベレト、ボティス
、マルコシアス、マルバス、マルファス、ムルムル、モラクス、ラ
ウム、レラジエ、ロノウエ

「！！」

燐の早口ながらも唱えた呪文により呼び立された72体の悪魔達が、
上空で円を作りながら燐の血を使い一人分の門を作った。

しかし出来たばかりの門が軋みそれに伴う悪魔達の微かな呻き声に
燐は綱吉を門のところまで引っ張った。

「ちい！俺の血を使っても持たないか…綱吉早く門に入れ。これを
逃すと帰れなくなるぞ！！」

「嫌だ！だって俺まだ雪男さんたちと一緒にいたい。」

「馬鹿か！向こうでお前の帰りを待っていてくれる大切な仲間た
ちが、居るんだろ？そいつらを悲しませるな！！」

「うう…ひっく、だって……せっかく友達になれたのに！！」

「燐様早く！我ではこれ以上持ち応えられません！！」

「大丈夫だ綱吉。また俺たちはいつか絶対に会えるよ」

燐の優しい言葉に綱吉は、しゃくりを上げながら静かに頷いた。

びしい…。

「燐様！！！！×悪魔全員」

「さあ早く行け！いつかその時に…」

綱吉が、門を潜る前に一度燐の方を向き一言。

『またね』

綱吉が、門の向こうに消えると同時に粉々に砕け散った門に燐は、一回ため息をつく朝日が昇り初めた空に笑いながら自分の使い魔たちの元に向かった。

「またな…俺の大切な異世界の友達」

「お……ろ……な」

「う……ん……後5分……」

「起きろって言ってるんだダメツナ！」

「ぐほお！？？」

小さな黒服を着た赤ん坊の蹴りに綱吉はむせながら涙目できっと己の家庭教師を睨んだ。

「痛いじゃないか！これ以上俺が馬鹿になったらどうするんだよ！」

「安心しろ。その時は、ねっちょりと地獄の修行だぞ」

「ねっちょりヤダ！」

嘆く綱吉にリボーンは、目覚まし時計を綱吉の方に投げた。

「ひい……！」

短い距離ながら凄いスピードで迫って来た目覚まし時計をかがんでかわすとさらにリボーンに抗議した。

「危ないじゃないか！さっきの当たったら俺死ねからね！？」

綱吉の訴ったえをリボーンは花で笑った。

「俺の弟子がそんぐれえで死ぬか。それより時間は大丈夫か？」

「時間？」

綱吉は、はっとした顔になり慌ててベッドに転がっていた目覚まし時計の時間に真っ青になった。

「8時30分！！遅刻だあ！」

バタバタと階段を降りて行く不甲斐ない弟子にリボーンはため息をつきながらこの数日の記憶のない違和感を抱えながらも再びハンモックで鼻提灯を膨らませていた。

「そう言えばあれは夢だったねかな？」

母親の奈菜に朝食を進められたが断り忙いで家から出て早くない足を懸命に動かしながら今日の長い様で短い夢について考えていた。

「ちょっと怖いけどとても大切な夢だった様な気がしたかな…でも」

一度止まり綱吉は青い空を見て微笑んだ。

「夢でも良いからもう一度あの青空の様な少年に会いたいな」

キーンコーンカーコーン。

空を見ていた綱吉だが、学校のチャイムの音に我に帰り完璧に遅刻したことに気づいた綱吉は、校門前で狂暴な笑顔を浮かべながら愛

武器に下を嘗める風紀委員長の顔に綱吉の顔色はみるみる悪くなっていた。

「か、か、噛み殺されるううう ……!!!!」

綱吉の悲鳴が波盛町に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4153u/>

マフィアと祓魔師

2011年10月11日11時02分発行